露國長司祭ファウロウ著
日本木邨伊薩阿克譯

說教學完

明治廿五年七月

正教會

爾宜しく務めて神よ悅ばれ愧
かきの工司となり善く眞道を
頒つべし

提摩後書第二章十五節

例言

凡そ人の思想は最も複雜ゑして千態万狀なるも之を發表するの方法い言語と文章の二途ゑ過ぎずされバ教會の牧師傳道者が奥妙深玄なる基督教の眞理救道を以て人を教誨するゑも亦必ゼ言語文章ゑ頼らざるはなし然れども文章に則あり言語に法あり苟も此則を識り此法を得るゑ非ゼんバ滿腔ゑ藏する眞理を吐露して其期する所の目的を達すると能いゼ而して此法則を併了し得るものい教會修辞學即ち説教學なり夫れ修辞の學い博し凡そ言論を以て社會に立つ者い必ゼ之を知らざるべからず特ゑ説教學は福音ゑ從事する牧師傳道者の必ず學バざるを得ざる學科たりされゼ今日ゑ至るも其書籍ゑ乏しきは寔ゑ我國傳道事業の一大欠点にして予の常に遺憾とする所なり是ゑ於て予い予の非才を顧みゼ濫りゑ我主教尼适頼師の命を奉ト西暦一千

八百七十七年の刊行に係る露國長司祭ファウチロウ氏の原著說教學を翻譯して之を世に公にする所以なり

書中記する所の詳悉い一に讀者の劉覽に讓りて茲に贅せずと雖ども著者自ら云へるが如く「思想の深遠研究の完備叙述の快活等い實に本編の特質たり」故に本書は凡そ說教學上に關する百般の定義規定を網羅して漏さゞと雖ども說教學の主とする所い實際的經驗的の學たるを以て其詳細なる個々の点に至りては到底紙筆の能く尽す所にあらず且つ原本い正教會の精神氣象に山て著述し殊に露國正教會信徒の精神氣象に應ト て著述したるを以て其神髓に至りてい地の東西南北を問はゞ何國に於ても異なる所なしと雖ども其個々の点に至りてい或は我國傳道事業に應用すべからざるものあらん

予の本書を譯了したるい實に二ヶ年以前に在りて今日に比すれバ尙

は未た原語に不熟の際なりしを以て往々行文の澁滯熟字の不允當意義の不明瞭なるを免れず是を以て更に訂正を加へんとを圖れるも會々同志傳道者切りに本書の出版を催して止まゞ故に倉皇茲に剞劂に付せり尙ほ異日を俟て大に訂正する所あらん讀者幸に文句の不巳を咎めゞ唯其意の有る所を了會し更に一歩を進めて書中より我國傳道事業に獨得の方法を發見せられんとを望む是れ單り予の希望のみならゞ實に我國傳道事業の一大精華たるに庶幾からん乎

明治廿五年七月

譯者謹識

教會說教學目次

入門

第一章　教會說教の定義……一
第二章　神言を宣傳する心靈的牧者の本分……二
第三章　說教の定義……四
第四章　神言を宣べ傳ふる場所及時機……五
第五章　說教の目的……八
第六章　說教業務の緊要なるを論ず……九
第七章　說教職を充分成遂ぐる能はずとする口實の立たざるを論ず……一二
第八章　聖堂說教ゑ訓錬の緊要なるを論ぜ……一七

第九章　説教學（ホミレチカ）の定義……一八
第十章　説教學の組織……一九
第十一章　説教學の原則……同
第十二章　説教學の規則の範圍……二〇
第十三章　説教學上の演習の方法……二一
第十四章　説教學に關する歴史上の短簡なる指示……二二

第一分類

教會説教の問題を論ぜ
第十五章　第一分類の總論……二六
説教問題の總論
第十六章　説教問題の範圍……二七

第二、聖書の解明を論ぜ
第十七章　聖堂の講座に於て聖書を解明するの緊要なるを論ず……二九
第十八章　聖書の章句及書を説教問題に選定するを論ぜ……三一
第十九章　聖書を講明するに就ての注意……三四

第二、ハリストス正教の教の叙述法を論ぜ

第二十章　聖堂の講座より基督教の教を叙述するの必要及此教の種類……三五

定理（ドグマ）上の眞理

第廿一章　講説の爲に定理を撰定すべきを論ず……三六
第廿二章　聖堂の講座に於て定理を解明するの規則……三九

德義上の眞理

第廿三章　聖堂の講座より於て述ふべき實踐的說教問題……四二

第廿四章　聖堂の講座より於て德義上の眞理を解明するの規則……四四

儀式上の眞理

第廿五章　聖堂の講座より於て解明すべき儀式上の眞理の問題……五〇

第廿六章　奉神禮の諸問題を述ぶるより就きての注意……五四

聖歷史上の眞理

第廿七章　聖歷史上の眞理の首要なる問題……同

第廿八章　聖堂の講座より於て聖歷史上の問題を使用するを論ぜ……五七

增補問題

第廿九章　聖堂の講座より於て增補問題を述ぶるの主要なるを論ぜ……五八

第三十章　增補問題の首要なる種類……五九

第三十一章　增補問題を解明するより就ての注意……六二

諸種の格段なる說教問題を論ぜ

第三十二章　聖堂の講座に於ける說教問題を配賦するの肝要なるを論ず……六四

第三十三章　諸の場合と事情とに應ぜる說教問題を撰定するの諸点……六五

(甲)教會の時機に適當なる說教問題……六六

第三十四章　主日の説教問題……六七
第三十五章　教會祭日の説教問題……七三
第三十六章　齋日の説教問題……七七
（乙）教會及信者の事情に適應せる説教問題……八二
第三十七章　最も壯嚴なる日の説教問題……同
第三十八章　聖堂及其他のものを成聖する時の説教問題……八四
（丙）種々の場合に應ぜる説教問題
第三十九章　社會偶然の事件より於ける説教問題……八六
第四十章　個々の場合より於ける説教問題……九一
第四十一章　説教者自らの位置及狀態より應する説教問題……九六

第二分類

説教の樣式を論ぜ

第四十二章　説教樣式の價値……一〇二
第四十三章　最も多く使用する説教樣式……一〇三

演説

第四十四章　演説（スピーチ）の定義……一〇四
第四十五章　經句より演説を組織するを論ず……同
第四十六章　演説より於ける經句の價値……一〇六
第四十七章　經句を撰定するを論ず……一〇七
第四十八章　預め演説の順序を組織するの緊要なるを論ぜ……一〇九

第四十九章　演說を組織するよ緊要なる性質……一一一
第五十章　演說を組織する部分よ關する注意……一一九

說教

第五十一章　說教（ペセーダ）の定義……一二三
第五十二章　說教の使用を論ぜ……一二四
第五十三章　說教の材料よ就ての注意……一二五
第五十四章　說教を組織する部分よ關する注意……一二七

啓蒙說教

第五十五章　啓蒙說教の定義……一四三
第五十六章　說教に啓蒙教授の樣式を使用するを論ぜ……同

第五十七章　啓蒙說教の問題……一四四
第五十八章　啓蒙說教の組織法……一四五

簡約說教

第五十九章　簡約說教の定義……一五三
第六十章　簡約說教の種類……一五四
第六十一章　簡約說教を使用するを論ぜ……一五五

第三分類

教會說教の精神即ち內部の性質を論ぜ

第六十二章　教會說教の內部性質の要点……一六〇

說教の教化力を論ず

第六十三章　教化力の定義……一六一

第六十四章　教化力の要件……一六二
第六十五章　說教の神聖たるべきとの定義……同
第六十六章　說教の聖非聖の外面上の徵証……一六五
第六十七章　說教の眞實たるべき事の定義……一六八
第六十八章　說教の眞實なるを証する諸点及說教の眞實なる性質と反する欠点の見ゆる徵証……一六九
第六十九章　說教の救贖的たるべき事の定義……一七四
第七十章　說教に必要なる救贖的の精神は何處より汲得するや……一七五
第七十一章　說教と救贖的たるべき精神の乏しき外面上の徵証……一七八

第七十二章　教會說教と教化力の精神を傳ふる方法……一八一

勸化力を論ず

第七十三章　勸化力の定義……一八三
第七十四章　說教の勸化力の要件……一八四
第七十五章　說教と於ける聖職の定義……一八五
第七十六章　說教中と聖なる威嚴の足らざる徵証……一八八
第七十七章　說教と於ける牧者の健忍の定義……一九一
第七十八章　說教の健忍と反する欠点……一九二
第七十九章　說教者が其宣ぶる所の教を確信すると の自然說教中に顯はるべきを論ず……一九五
第八十章　說教者が傳ふる所の事に對して說教者自身の確信の足らざるより生ずる欠点……一九七

第八十一章　說教と勸化力を傳ふるの方法……一九九
活動力即ち傳膏を論ず
第八十二章　活動力の定義……二〇二
第八十三章　活動力の個々の定義……二〇三
第八十四章　傳膏せられたる說教の要点……二〇五
第八十五章　感動の定義……二〇六
第八十六章　痛感の定義……二〇八
第八十七章　傳膏と不適當なる說教の性質……二一〇
第八十八章　說教と傳膏の精神を傳ふる方法……二一四

第四分類

教會說教の叙述法即ち外部の特性を論ぜ

第八十九章　說教を叙述すると緊要なる性質……二一六
第一
第九十章　說教の明瞭と關する一般の定義及此定義を聖堂說教と應用するを論ず……二一七
第九十一章　叙述の無上明瞭と關する定義……二一八
第九十二章　無上明瞭の價値……二一九
第九十三章　尋常明瞭と關する定義……二二〇
第九十四章　尋常明瞭の緊要なるを論ず……二二二
第九十五章　尋常明瞭と叙述し得るを論ぜ……同
第九十六章　尋常明瞭と叙述すると方りて避くべき極端……二二四
第九十七章　普通明瞭の定義……二二五

第九十八章　普通明瞭の肝要なるを論ず……二二六
第九十九章　通俗語を以て普通明瞭の要求を成遂ぐるの差支なきを論ず……二二七
第一百章　說敎中より通俗語を用ふるに由て生ずる極端を預戒すべきと論ず……二三〇
第百〇一章　常に明瞭より述ぶる經驗を得るの方法……二三三

第二　說敎の叙述法の品格を論ぜ

第百〇二章　總體演說の品格より關する定義及此定義を說敎より應用するおとを論ず……二三六
第百〇三章　總体演說に於ける謹肅及殊より說敎より於ける謹肅を論ず……同

第百〇四章　總體演說の威嚴及特より說敎の威嚴を論ず……二四〇
第百〇五章　說敎の叙述より品格を與ふるの方法……二四三

第三　叙述法の美を論ぜ

第百〇六章　總體演說の美より關する定義及此定義と敎會能辨學より應用することを論ぜ……二四四
第百〇七章　說敎の美の首要なる種類の定義……二四五
第百〇八章　以上より指示せる言辭の性質を說敎より應用するを論ず……二四六
第百〇九章　聖堂說敎に於て言語を美妙的に述ぶる鍛錬を得るの方法……二四九

第五分類

教會說教の傳達を論ぜ

第百十章　善き發音の効力殊ゑ聖堂の講座ゑ於ける善き發音の効力……二五一

第百十一章　發音を組織するの要素……二五二

第一　音聲を論ぜ

第百十二章　音聲の適當なる整理を說教ゑ傳ふるゝ何ゑ成立するや……二五三

第百十三章　音聲の强弱……同

第百十四章　音聲の高低……二五四

第百十五章　音聲の緩急……二六〇

第百十六章　發音の中止即ち猶豫……二六二

第二　發言を論ぜ

第百十七章　善き發言の特質……二六四

第百十八章　發言の明瞭……二六五

第百十九章　發言の正確……二六六

第三　態度を論ぜ

第百二十章　發音に於ける態度の價値……二六九

第百廿一章　態度ゑ關する規則の性質……二七〇

第百廿二章　態度ゑ關する汎則……二七一

第百廿三章　講座ゑ於ける説教の動作に關する個々の注意……二七二
第百廿四章　發音を成全するの方法……二七七

第六分類

草稿なき説教即ち即席(インプロヴイザーチヤ)説教を論ぜ

第百廿五章　即席説教の定義……二八一
第百廿六章　即席説教の肝要なるを論ぜ……二八三
第百廿七章　即席説教ゑ習熟し得るを論ぜ……二八六
第百廿八章　即席ゑ準備する一般の方法……二八八
第百廿九章　即席説教に錬習すべきを論ず……二九一
第百三十章　即席説教と始むる者を殊ゑ如何なる欠點より預戒すべきや……二九六

第百三十一章　以上ゑ指示せる欠點を預戒し及即席術を成功する首要なる方法……二九九
第百三十二章　聖堂の講座より即席説教をなすを論ず……三〇一

結論……三〇六

教會說教學

入門

露國長司祭ヱヌ、フォウロウ著
日本　木村伊薩阿克譯

第一章　教會說教とは、牧者が神言を宣傳するをいふ。

吾人の愛し、牧者の傳道を說教と名けたる所以は、即ち教會說教一般の特性を指定し、其と同時に說教學全般の意義及性質を指示せんが爲なり。然るに、多數の人々は、教會說教を以て能辨的演說の種類と同視せるが故に、之に能說學の汎則を應用して以て說教規則を制限せり。されど說教者の本務は其民の心靈を教誨するに在るを以て、說教者たる者言を以て人民に向ふ時は、宜しく會話的に說話し、所謂演說體の如きは、固より之を用ふるの要なしとす。然れど、說教の叙述上往々純然たる能辨的演說体となる

もあるを免れずと雖ども、これ其本然の性質にあらざるなり。要するに説教は、信仰及敬虔の課程――牧者の被牧者に於ける日課――神父が神子に對する教誨なるが故に、須く之に準じて其規則を編成せざるべからず。而して將來の説教者の慮るべき所は、能辯家の如く講述するにあらず、乃ち人民の心靈的牧者、教師の講述すべき所の事、及其講述法の如何に在り。

第二章　神言を宣傳する心靈的牧者の本分

凡そ神言を傳ふるは、心靈的牧者の當に務むべき本分なり。主は曾て舊約に於て心靈的牧者を、イズライリの家の番人と名け、彼等を以て已が聖旨を衆民に諭告せしめ、又不注意にして其本分を行へる牧者に嚴重なる責任を負はしめたりき（エゼキイリ三ノ十七至廿一、三十三ノ七至九）。イエスハリストスが其聖使徒等に向て『爾往き、万民を招て徒トナシ、父ト子ト聖神ノ名ニ於テ之ニ洗禮ヲ施シ、之ニ教ヘテ我凡ソ爾ニ命ズル所ノ者ヲ守ラシ

メヨ』（マトフェイ八ノ十九、廿）といひ、又『爾等普天下ニ往キ、福音ヲ万民ニ傳ヘヨ』（マルクノ十六）といはれしい、彼等に眞正の信仰と主の誡命と衆人に教ふべきことを誡めたると偖に使徒の後嗣者たる教會の衆牧者に亦之を誡めたりし也。聖使徒等い福音の事業、即ち傳道を以て自已の離るべからざる本分として貴重しつゝ、固く主の誡命を行ひ、又其後嗣者にも熱心以て主の誡命を成遂ぐべきことを遺命せり。かの聖使徒パウェルが『我福音ヲ傳フルト雖ども誇ルベキ所ナキニ縁ル、蓋シ我已ムヲ得ザルナリ、我若シ福音ヲ傳ヘズバ則チ禍ナリ』（コリンフ前ノ十六）と曰ひしい、已れ自らのことを言ひたるなれども、亦衆牧者に勸説したる也。聖使徒又テモフェイに書して『我神及イエスハリストスノ前ニ於テ爾ニ諭ス、ハリストス即チ其國ニ顯著スル時、將ニ生者死者ヲ審判セントス、爾宜シク道ヲ傳フベシ、時ヲ得ルト得ザルトヲ論ズル母レ、宜シク專ラ之ヲ務メ、諸恒忍ト

教誨トヲ以テシテ、督責、儆戒、勸勉スベシ』(テモフェイ後書四ノ一、二)と言ひ、又テモフェイ及テイートヨ書して『學問アリ、强健ニメ人ヲ正教ニ勸メ、且ツ辨駁スル者ヲ拆ク所ノ人ヲ監督ニ』(テモフェイ前書三ノ一ノ九、テイート一ノ九)擇ぶべきことを命せり。されば使徒の後嗣者たる教會の師父等は、其全生命と全勞働とを擧げて、特ヨ説教の業務に供したるを以て、竟に教會の教師とは名けられたり。又全地の教會は心靈的牧者をして其教師職を拒絶せざらしめんが爲ヨ、古昔より公會の特別なる議定と規則とを以て、聖務者に神言を傳ふるの責任を負はしめ、且此本分を怠慢する者を懲罰せり(使徒規則第五十八條、第六全地公會規則第十九條)。斯の如く神の直接の誡命と、聖使徒及教會の聖師父等の摸範、教誨、並に教會の規則等は、牧者をして熱心に神言を宣傳せしむ。

第三章　説教の定義

説教とは之を狹義にて云へば、唯聖書の或眞理を通俗的ヨ叙述し、及多

少連續して叙述することなり。而して通俗的叙述とは、多數の聽衆に向て述ぶるを云ひ、其多少連續したる叙述とは、一定完備せる説教を組織せんが爲ヨ、論理上の法則次序に循て搆造せる思想より成れるものを云ふ。詳細なる教誨、勸説、預戒、規責等ヨ關しては、縱ひ如何なる教を心靈的牧者より要求する事あるも、それ被牧者を治理する牧者の本分ヨ係れるが故ヨ、之ヨ關するの規則は、牧者教育學ヨ於て述べざるべからず。

第四章　神言を宣べ傳ふる場所及時機

牧者の説教すべき場所は、特ヨ信仰及敬虔を衆人ヨ教誨する所の教場たる神殿ヨ於てせざるべからず。而して聖師父等の聖堂を(ディダスカリオン)(教場)(スホラ)(學校)(ギムナジウム)(高等學校)と名けたるは、其著書説教ヨよりて詳なる所ヨして、聖堂に於て説教するとは、實ヨハリストス教の初代より行はれたりし也、蓋し當時學校たる聖堂に於ては、男女の

爲に特別なる場所を定め、聖書を日課書として之に課し、說教の問題い教授せらるゝ衆人の性質狀態に從ひ、以て講ぜべき聖書の個所を選び て直ち之を解明し、或い日課として之を課し、而して聽衆は恰も學生の如く、一日一二回つゝ說教に集會したる也。故ち現今ち至りても尙聖堂に於て神言を宣べ傳ふるい最至當なりと雖ども、其講說すべき機會と聽衆のある所は、聖堂の內外を問わず、那處に於ても說教することを得べし、否な爲さゞるべからず。されば吾人が天の敎師の人民を敎誨するや、單り聖堂又は會堂に於てせしのみならず、或い山上に、或い舟中に、或い市街に、或い村落ち於てせり。又聖使徒い、單り人前に於て敎へたるのみならず、乃ち一般の家裡に於てせり（使徒行實二十ノ廿）、且又家裡原野等の諸處ち於て神聖なる諸儀式を行ふことは、牧者ち場所の制限をなさゞして說敎すべきことを勸說するなり。

以上陳述したるが如く、說敎い古來常に奉神禮と合して行われたるが故に、殊に說敎すべき機會い奉神禮の時に在りとす（使徒行實二十ノ七）。『神ノ奉事ハ啻ニ救世主ガ吾人ノ救贖ノ爲ニ立テラレタル祈禱感謝ヲ獻ゲ、及機密ヲ執行スル事ノミニアラズ、乃チ救世主ノ聖言ニ有ッ所ノ神誡ヲ敎フルヿモ亦其中ニ在ルヲ以テ』（公開說敎の序文聖務會院の出版）牧者い少くも主日祭日及齋日（信者を痛悔領聖ち準備するの時）ち於て神言を傳ふべし。然れど說敎問題の甚だ夥多なるが故に、獨り聖體禮儀の際之を講說するち止まらず、須らく早課、晚課、或い時課等に於て宣べざるべからず、加之、牧者が信者の爲めち種々の場合に於て執行せらるゝ神聖なる儀式い、說敎者をして祭日に至るまで敎訓の辭と猶豫することを得ざらしむ、即ち說使者い預め之と宣ぶるを可とす、否な宣べざるべからざる也。此れ聖使徒パワルがテモフェイち時を得ると得ざるとち論なく說敎すべき

ことを勸說しつゝ、彼れ自らも行ひて、單に晝にのみならず、夜に於ても亦衆人を敎ふべきことと誡めたる所以なり。（使徒行實廿ノ廿一）

第五章　說敎の目的

牧民的說敎の目的は、敎牧者よハリストス正敎の精神に因て、眞正ハリスティアニン」たる信と行とを啓發するに在り。聖使徒曰く『我等ハリストスヲ傳へ、諸ノ智慧ヲ以テ諸人ニ勸戒シ、諸人ヲシテ全キヲハリストスイイススニ成シテ、其前ニ立タシメントス』（コロス一ノ二十八）と。此高尙なる目的を達せんよりは、智慧に關しては、ハリストス敎の救の眞光を以て之を開發するに在り、又意識に關しては、之を善に向はしめ、或は不斷勵精してハリストス敎の愛の律法を實行せしむるに在り、又感情に關しては、其中に敬虔なる感情、若くは心靈的の高尙と純美とに於ける興味を發生し、並に心中に「ハリスティアニン」たるの希望を舊起せしむ

るに在りとす。

第六章　說敎業務の緊要なるを論す

說敎業務の重要なることは、其目的に關する前章の見解によりて明瞭なり、而して此務は牧者の業務中實に初頭の業務なりとす。されば牧者は衆人に成聖の恩寵を降す機密を執行するよりも亦預め其機密の何者たることを說明せざるべからず、是れ機密の能く人の救となるは、之を領くる者が、唯其受くる所の事、即ち敎へらるゝ所のことを信認する時のみなるが故なり。牧者は說敎業務に於て、殊にイイススハリストスの至近なる勤務者、同勞者（コリンフ前書三ノ六至九）又第一に已をハリストスの福音者（コリンフ前書一ノ十七）なりと數へたる使徒の後嗣者、人間の光たる神の預言者（マトフェイ五ノ十四、十五）、及主全能者の神使（マラヒヤ二ノ七）として顯はるゝなり。又說敎者が神の諸子を養育し、ハリストス敎會の體軀を造成し、（エフェス四ノ十二）神の光

榮を弘布し、其被牧者の永遠の救贖を整齊するも亦殊さ此業務を以てす、加之、此業務は牧者の爲さも亦最も重ぜべき特點なり。主自ら罪人を痛悔に向いしむる所の敎師を已の口と名けて曰く『爾若シ其貴キヲ擇ビ、其賤シキヲ離レナバ則チ爾ハ將ニ我ガ口ノ如キヲナサントス』(イエレミヤ十五ノ十九)と、故さ能く此業務に堪ふる所の牧者は、現世に於て二倍の尊敬を受くるが如く、(テモテフエイ前書五ノ十七)天國に於ても亦將さ『大ナル者ト稱ヘラレントス』(マトフエイ五ノ十九)。

故に不注意さして說敎の本務を行ふ時は、責任の困難亦隨て生ぜ。主曾て之を以て一預言者を威嚇して、『人ノ子ヨ、我惡人ニ向テ曰ク、爾固ヨリ必ズ死ナント、唯爾之ヲ警戒セズ、亦言ヲ以テ惡人ヲ戒メ、其惡途ヲ离レテ生命ヲ救フヲ致サシメズバ、則チ惡人必ズ其罪ノ中ニ死ナン、然レ𪜈、我必ズ其血ヲ爾ノ手ニ討チン』(イエセキイリ三ノ十七至二十一)と云ひつゝ、神言を宣べ傳ふ

ることさ怠慢なる牧者をも亦神の審判の前に立たしめたり、即ち心靈の開發不充分さして不法の中に死せし全被牧者に代りて、神の審判の前さ答ふべき責任を牧者さ負いしめたるなり。蓋し牧者い第一に世俗の需用と經營とさ束縛せられて終日を徒らさ肉體の係累に消光し、又止むことを得ぜ世事に束縛せらるゝ常人に對して之を敎ふるの志望なく、或い彼等さ斯の如き開發に於けるの時機方法を示指せず、或い彼等をして心靈の能力を發起せしめぜ、又之さハリストス敎の高尙なる眞理を解明するおとなく、且つ永救を達するさ於て諸人さ必要なる心靈的開發の程度さまで之を指導せざる時は、ハリストス敎の信仰及德義の學問さ敎養すること難ければなり。第二に凡そ俗人い貴賤貧富を論せぜ、學不學、智者無智者を問いぜ、何人も亦心靈的牧者さ代りて「ハリスティアニン」を開發するの業務さ從事することを得ず、蓋し何人も牧者の有

する教師職の聖權（人よりするに非ず、乃ち神よりするの權）を帶べる者なく、又神が各牧者に賜ひし所の方法を有する者なければなり。然るに彼牧者よ對して大よ救贖の感化を施し得べき牧者にして、彼等よ之を得せしめんことを勸めず、且つ等閑よして彼牧者が身を終る迄不法の中に在るを觀過する時い、牧者い神と人とに對して其罪大よして、主神い斯の如き者の血を直接よ其牧者の手より要求せん。

第七章　說教職と充分成遂ぐる能いずとする口實の立たざるを論ず

說教業務の重大たるにも拘はらず、種々の口實を設けて、正當よ之を行ふことを避けんと欲する者甚だ鮮とせず。而して其口實とする所を察するよ、一を人民の信仰の薄弱なるよ歸し、一を普通傳道の無効なるよ歸せり。されど斯の如き口實は到底成立すべきものよあらざる也。

（第一）彼等の言ふ所を聞くよ、曰く、人民は說教を好まず、故よ心ならずも吾等の（說教者自を指す）熱心を冷却して、終よは其講說を抑止せしむるよ至ると。然れども信者中奉神禮よも亦熱心を顯いさゞる者多しとて、果して聖務執行の度數を減じ得べきや、又人民は說教者よ對して不注意なるが如く見ゆればとて、決して說教者を惑亂せしむべからず。若し其全聽衆中に於て其宣ぶる所の教を聞かざる者ありとするも、其中過半數の人々は之を聽かん、若し亦多數人之を聞かずとするも、其中の若干人は必ず之を聞かん、今假りに一人も注意して之を聽聞する者なしとするも、（斯の如きことは万よ一だもなきことなれども）尙說教者は『我（神）ヨリ彼等ニ警戒セヨ、〻〻唯若シ惡人ヲ警戒シ、之ヲシテ轉ジテ其途ヨリ離レシムルニ、彼若シ轉シテ其途ヨリ離レズバ、則チ此惡人ハ必ズ其罪ノ中ニ死ナン、然レドモ爾ハ乃チ爾ノ靈ヲ救ヘリ』（冊三ノ八至九）と云へる神の誡命と約束とを記

憶し、滿腔の熱心を以て已の聖なる本分を行ふべし。次に人民の説教に不注意なる大原因は、説教者の其業務に對する熱心注意の足らざるに在り。牧者は斷えず深く被牧者の心靈の要求に注意し、眞正牧者たるの精神、權威、及眞理に對し、被牧者に對する僞なきの愛を以て神言を傳ふる時は、何處に於ても熱心なる聽衆に乏しからざることを疑ふべからず。然して牧者の説教の、時として心靈的德義の狀態に適應せず、眞正の活動力なく、且熱切の勸勉なき時は、聽衆の不注意に訴ふること能はず、斯の如き場合に於ては、人民は説教を見て、唯時の便宜と、牧者の本分の要求上より宣ぶるに外ならざる一の儀式を行ふが如く想像するの習慣を養成するもの也。

(第二)彼等は又聖堂説教の實功少なき事を示して曰く、聖堂説教は殆ど如何なる利益をも見ず、假令ひ人民は常に好で説教を聞くも、實際人民

は之を以て益することなく、説教の後も説教の前の狀態に異なるなしと。或者は之を根據として牧者に被牧者の居宅及其他の場所に於て彼等と對坐の際對話をなさんことを勸告せり。然れども福音の言を以て云ふ時は、個々の對話を爲さゞるべからざるは勿論なれども、聖堂説教も亦廢すべからざるは、否要用といはざるべからず。其牧者の被牧者を親密に指導するは緊要の事にして、又大に好結果を奏することなれども、到底聖堂説教の必用と利益とを廢することは能はず。若し聖堂説教にして正當に行はるれば何ものを以てするも、之に代用せらるべからず、且つ必ずしも無結果たることあらざればなり。其代用せられずとは、一方より牧者は已の被牧者各自に向て悉くハリストス教の教義を授くるを得ざれども、只多くの被牧者が、共に牧者の教課を聞く時に於てのみ之を能くし、又牧者は其配下の信者と談話する時は、各人の種々なる事情に

應ドて、パリストス教の信と行との日課を説明し、應用するおとを得べきも、凡ての信者ゑ對して緊要且つ救贖となるべきおとと授けんゑは、熱心なる聖堂説教を除て、他ゑ良法なきを云ひ、又他の一方よりハ、牧者若し配下の信者と談話して、聖堂説教よりも尚能く信者各自の要求に應ト得るとする時は、牧者が聖堂の講座に於て明かに神の代理者として宣べ、或は神の面前に於て愛と勸説とを以て滿されたる言を宣ぶる時は、聽衆をして一層大なる感動心を生せしむる効力あると疑ふべからざるを云ふ也。其無結果たるを得ぜとは、凡そ吾人の常言たりとも常に應分の結果なくして空中ゑ消滅する者ゑあらぜ、殊ゑ神言は主神の證せるが如く、徒然に歸せざるを云ふ也。されど説教の善感化は突然ゑ顯はるゝものゑ非されバ、唯耐忍して其感化を待たんとと要す。思ふに、或者ハ種子を播くと同時ゑ之を刈らんとを欲するが故ゑ、僅かゑ經驗

せる後明かゑ其勞働の結果を見ざる時は、忽ち落膽失望するものなり『視ヨヤ、農人地ノ嘉産ヲ得ルヲ望ミ、久シク忍デ以テ之ヲ待チ、前後ノ雨ヲ得ルニ及ブヲ』(イヤコフ五ノ七)されば説教者も亦其播きたる種子ハ、疑ひもなく神自ら其時ゑ於て成長せしむることを樂みつゝ、耐忍して其説教の結果を待つべきなり。

第八章　聖堂説教に訓錬の緊要なるを論ぜ

以上述べ來りしが如く、説教業務の首要なる諸点ハ、此業務ゑ對して特別の準備なかるる可からざるおとを理會せしむ。而して『福音者ニ言ヲ與ヘ、其言ヲ已ノ忠義なる僕ノ口ニ置クモノハ』主自らなるが故に、能く此業務を成遂ぐる第一首要の方法ハ、神恩の幇助なりと雖ども、尚牧者ゑ於ても亦可及的の勉勵を要するハ素より當然のおとなり。是れ牧者が『務メテ神ニ悅バレ、愧ナキノ工司トナリ、善ク眞道ヲ頒タンガ爲ナリ』

（テモフェイ後書二ノ十五）、殊ゝ將來牧者たらんとする者は、力めて完全の教育を受けざるべからず、これ其教育の人民開化の元素となり、源泉とならんが爲なり。加之、牧者は乏しき手を以て他人ゝ眞理と善行の種子を播かんゝは、先づ成るべく多く自得せんゝことを要す。然れども、將來の牧者の尙學習すべき一學科あり、即ち自己の知り得たることを他人ゝ教ふるの方法是なり。蓋し充分の教育を有するも、往々他人を教育するの良法を得ざることあれば也。

第九章　説教學（ゴミレティカ）の定義

「ゴミレティカ」は教會説教の規則を解明し、且つ能く傳道の職務を成就するゝ指導するの學科なり。「ゴミレティカ」は「グレチャ」語の（ヲミリン）より出で家裡の對話、及善良なる談話の精神及語氣を以て、公ゝ教を宣ぶるの意なり。

第十章　説教學の組織

説教學は牧民的説教全般の意義及樣式、精神及序述の如何を指示するを務とす。尙之ゝ附加すべきものは、説教者の發音及即席説教（イムプロワイザーチヤ）ゝ關する規則なり。故ゝ説教學全体の組織は自然左の部分ゝ分解せらる。第一、説教問題、第二、其樣式、第三、其精神、即ち其内部の性質、第四、序述法、即ち其外部の性質、第五、發音法、即ち組織せる教を人民ゝ傳ふるの方法、第六、即席説教、即ち筆記の準備なき説教是なり。

第十一章　説教學の原則

説教學の規則及教誨ハ、第一、聖書ゝ基つかざるべからず、蓋し聖書は聖神が全世界ゝ福音せる神聖なる説教ゝして、多くの教誨を授くるものなれば也。第二、聖教會の教と其議定とゝ基づかざるべからず、蓋し教會は吾人ゝ教ふるゝハリストスの福音事業ゝ從事する者の當ゝ務むべ

きまとと、及説教の摸範とを指示すれば也。而して説教に關する此等の諸學科は、如何なる場合と雖とも常に教會の精神及規定より離れざらんことを注意せざるべからず。第三。聖神父、即ち常に説教の師範者たる教會の教師輩の摸範及教誨に基づかざるべからず。第四説教に適當なる應用を有し、且つ有すべき論理學及審美學の汎則要求に基づかざるべからず、蓋し説教は此等の文章の一種類たるを以て、文學的文章の區域に入れば也。又たとひ説教は其固有の特質を有するにもせよ、他の文章と同じく道理及趣味上の評論に服すべきものとして、其目的の最善至美なる程論理學及審美學の要求を滿足せしむる也。

第十二章　説教學の規則の範圍

説教學は指南書としては、正しく其區域内に入る所のことを、成る可く完備に叙述すべしと雖ども、余り精密に渉るべからず。即ち(い)説教學に

至近の關係を有する他の學術に含有する所のことを複言せず、唯其眼目なる個所、若くは簡單に其規則を指示して、之を説教に應用するに止むべし。(ろ)説教學は一般に全説教者の指針となるものにあらず、唯説教業務に準備中の者、或は已に此業務に從事せるも、充分の經驗なき者に教誨を與ふるを以て足れりとす。(は)説教學は其効用に於ても、其範圍に於ても、自ら師範たるの性質を有するものにあらず、唯力めて完備に聖堂講座に於て述ぶるに適當なる文章の主点を指示するものとす。而して其詳細なる個條に關しては、説教者が此業務に於て得たる所の經驗に委するを以て最可とす。若し此等の區域を超ゆる時は、徒に學問の廣濶なる範圍に導くのみにて、毫も其裨益を增進すること能はざる也。

第十三章　説教學上の演習の方法

説教學上の演習の方法は、第一理論的（テオーリヤ）、第二實驗的（プラクチカ）の二者を要す。其理論

的演習は規則を述ぶるに成り、實驗的演習は實際に規則を應用するに成る。所謂實驗的演習に關するものは、(い)說教學の理論を說教に應用實行するの如何を指示する儀範的說教の分解なり、(ろ)學生をして自ら口頭、或は紙上に斯の如き分解をなさしむるに養成すること也、(は)學生をして預め說教を構造せしめ、若しくは圖式を有する文章を作らしむると也、(に)留意して諸學生の前に於て此等の實驗を分解批評し、並に學生をして自ら之に與らしむると也、(ほ)學生をして聖堂の講座に於て自由自在に說教することを習はしめんが爲に教場の講座より自己の說教、若くは他人の說教を發音せしむると也、(へ)學生をして即席說教に練習せしむると也。

第十四章　說教學に關する歷史上の短簡なる指示

ハリストス教會は、古昔より聖堂の講座に於て神言を宣傳したれども、

教會說教の規則を組織し初めたるは後世に在り。抑聖書中には牧民的說教に關する神言の教訓少なからず、即ち之を說教學の基本とす。ハリストス教の初代は、最も聖神の恩賜に富める時代たりしを以て、教會の教師輩は說教の精密なる規則を有するの必用なかりき。

說教業務に關する多くの注意の外に、此業務に關して特別の目的と、或精密とを以て述べられたる聖神父等の著述あり。假令ば(い)聖金口イオアンの神品職に就ての解釋の如き是れなり、其中には總て牧者の業務の重大にして且つ困難なること、及特に說教業務の重大且つ困難なることを論述せり。(ろ)福アウグスティンのハリストス教の學術(名詞)及無學者の啓蒙(名詞)なり、其ハリストス教の學術の末文、及無學者の啓蒙の全編には、純然たる說教學物体の意義を論述せり。(は)問答者聖グリゴリイの牧者の心得(名詞)なり、此文中には亦說教學に關する多くの教誨と規則とを

含有せり、殊ゝ其第三部、第四部ゝ多しとす。然れども是亦科學ゝ非ずして、乃ち古代教會の師父等が吾人ゝ遺くれる說教の完備なる摸範なり西教會ゝ於ては、第十六世紀より神學の開發と共ゝ、完備なる科學の種類、又は論說、文學、解釋等の樣式を有する說教學上の許多の著述を出せり、而して今日ゝ至る迄西教會の出版せる學術的の著書甚だ多くして、今之を集むれゞ應ゝ一大圖書館を建立するを得べし、然れども、正教會の說教は古代師父の說教の性質を存するを以て、多くは他教會說教者の能辨的演說ゝ同じからぜ、否な異ならざるべからぜ、且正教會及信徒の精神ゝ應じて特別なる要求を有するが故ゝ、其中の一書だも尙正教會說教者の爲ゝ緊要の指導たるを得ざるや明かなり。

說教學は、露西亞の著明なる牧者等の評論增補せる者ゝして、之を露國正教會の精神を以て作れる說教の最初の科學とす、而して思想の深遠、

研究の完備、叙述の快活等ハ、此說教學の特質たり。然れども說教學は尙未た完了するゝ至らぜ、蓋し其該博なるが爲ゝ、學生の日課書となすを得ぜして、唯教官又は牧者の爲ゝ最優の幇助を與ふるゝ止れり。故ゝ說教學は之ゝ同一なる精神を有し、且つ學生ゝ對して大なる應用を有する所の新奇の經驗を排除せざる也。

第一分類

教會說教の問題を論す

第十五章　第一分類の總論

說教問題に關する一般の疑問を分ちて左の二類となす、(第一)凡そ說教の區域に入ることを得べきもの、及び入れざるべからざるものゝ何なりや。(第二)聖堂講座に於て何時、如何なることを述ぶるゝ最も便利にして、且つ人民に緊要なりやといふ是なり。而して第一の問題に於ては、成るべく其全範圍を擧げ示さゞるべからず、但し其問題の比較上最も重要なるものを示し、幷に種々の問題の解釋及び叙述法に關しては之が適用を示さゞるべからず。第二の問題に於ては、說教の一般の圖式、即ち時と事情とに適應する問題の順序を示さゞるべからず。故に此分類の

第一箇條ゝ說教一般の問題に關するものとして、第二個條ゝ特別なる個々の問題に關することなり。

吾人ハ爰に說教問題の指示と、之を解釋するの規則とを合せつゝ、第一分類に屬せざる所の學科を、第一分類中に編入したるが如く思はるゝは、次下の分類に於て說教問題の解釋及叙述法に關して述ぶるによれり。然れども解明及叙述法の規則は、其種類一ならず、爰に種々の說教問題の解釋及叙述法に關して述ぶるは、恰も說教問題を選定する規則の連絡の如きものなり。去れど問題の解釋及叙述法の分類に於ては、說教の內外部の性質、即ち說教の精神及其外觀に關する所のことを述ぶるが故に、時として彼此の所論の互に相類似するものありと雖ども、其間常に多少の異同ありて、各其局所に於ては便宜且つ必要なるものなり。

說教問題の總論

第十六章　說教問題の範圍

教會說教の定義上よりすれば、說教全般の問題を成立するものは神言なり。

神言とは(イ)狹隘なる義より言へば、聖書、即ち其中に天啓の教を含有せる神聖の書を蒐集したるものなり。(ロ)博廣なる義よりして言へば、凡て正教會が聖神の直接なる指導に從ひ、及聖書聖傳に基つける教誨、規定、儀式等に於て、吾人に授けらるゝ眞理を云ふ。故に說教問題の重もなる種類は、聖書を解明するおよびハリストス正教の教を叙述することゝ也。又聖書の範圍内に入らざる者にても、「ハリスティアニン」の心靈的生活の爲に肝要なる教課を含有し、ハリストス教の重大なる問題を解說し、若くは聽衆の心を活動するの助けとなるものは、之を聖堂の講座より述ぶることを得るなり、但し斯の如き種類の問題は、之と聖書の問題に對して、增補問題と名づくべき也。

第一、聖書の解明を論ず

第十七章　聖堂の講座に於て聖書を解明するの緊要なるを論ず

聖書を解明するは、聖堂說教の一大問題なり。聖教會は常に吾人に聖書の教を說明す、例へば福音及書札の章句、聖詠、斷章、舊約書中の章句等是なり。周歲の間に於て聖堂に於て殆ど新約書の全部及舊約書中數多の章句を通讀す。斯の如く教會は恰も聖書を課程の如く授けつゝ、牧者をして明かに此課程を講說解釋せしむ。故に說教者は倦厭することなく、古代の有名なる說教者に倣ひて、被牧者にハリストス教の救の眞理及義の高尚なる摸範の本原を知らしめ、且彼等をして聖堂に於ても、亦家裡に於ても、自ら聖書を誦讀せしめ、或は之を聽聞せしめ、力めて完備、明瞭、眞實に了解するとに準備せざるべからざる。

近世の說教者は聖書を解明するを以て聖堂說教の材料となすに稀に

して、或者の如き説教の多くの指引中、其卓越の材料たる聖書の問題よ就ては、殆と全く云ハざるさへあり、豈よ遺憾ならずや。今説教に其適當なる名稱を下さバ聖書の講明なり、解釋なり、蓋し聖書は「ハリスティアニン」の敬虔なる諸學の基本よして、其中にハ、或ハ文字上に於て、或ハ精神上に於て、凡そ吾人が永救の爲よ知らざるべからざることを含蓄すれバなり。されば「ハリスティアニン」は唯聖書に基づける教を知るのみならず、直接に聖書の意義を知るを以て最善なりとす。申さバ聖書ハ神珍の書として、各「ハリスティアニン」の家に所持せざるべからず。唯人民ハ成く聖書を讀み得るものにあらざれば、牧者ハ屢々被牧者の前に於て之を講明し、以て聖書の教義及聖書中なる事件等を知らしむべし、或は聖書を讀み得る者と雖ども、約れ之を以て自ら悟り得べからざるものとなし、或ハ異種類の書を讀むに慣れて、全く聖書を誦讀せざる者あり、故に牧者ハ努めて被牧者を聖書の精神に導き、其前に聖書の種々の寶藏を啓き示し、以て聖書を愛敬せしめ、其中に靈の救贖の爲に最良の飲料を發見せんとを教へつゝ、彼等をして聖書を誦讀するに向ハしめざるべからず。

第十八章　聖書の章句及書を説教問題よ選定するを論ず

聖書中殊よ説教問題となるべきものは左のごとし。

(い)毎日の誦讀よ定まれる福音及書札の章句なり。大抵は其章句中の數節を採りて説教問題とすれども、時よ或は全章を問題として最も便益なることあり。斯く熱心の母たる聖教會は、其子たる信者の爲よ新約書中此等の章句を講明するを以て、「ハリスティアニン」は能く之を利用せんが爲よ、宜しく充分よ之を理解せざるべからず。

(ろ)聖詠なり。聖神父等は之を聖書中の約言、善道の金庫と名つけて、各人よ最も緊要にして且つ裨益あることを發見し得る者となし、又屢々之を選びて説教の問題となせり。聖詠い信者の愛讀する所の書なるを以て、之を諳んずる者甚だ多し。されば聖詠を講明するい、聽衆の爲に最も

好結果を奏し得ると以て、日々誦讀するに定まれる聖詠い、少なくとも奉神禮の時之を講明せざるべからぞ。是れ熱心なる聽衆が聖詠者の精神及其言語に倣ひて、悔改の祈禱、讃揚感謝の祝文、承認等を神に獻ぞることを學べんが爲なり。

(は)斷章(パレミヤ)なり。此中にいい常に重大且つ深奥なる意義を含蓄し、及祭日の性格性質等と言ひ顯はしたる者にして、最も明瞭に舊、新兩約書の關係、神に對する眞正なる務の何時も同一なること、諸義人の正しき信仰及敬虔の同一なること、幷に諸事件に於ける神の照觀法の同一なること等を說明せり。故を以て正敎會は斷章を誦讀するに先ち、福音及び書札を誦讀する前の如く、聖務者に『睿智(こころ)を醒(つ)けよ』てふ表示の言を高唱することを命じつゝ、吾人をして斷章に對して特別の注意を起さしめんことを務む。是に由りて之を觀れば、斷章も亦當に聖堂の講座より講說し

得るのみならず、殊に斷章中に顯はせることゝゐ、大抵譬喩、或ゐ預象、或ゐ預言にして、總て敎會に於て祭る所のことに對してゐ、說明或ゐ應用を要する著明の事なるが故に、之を講明するを以て最も肝要なりとす。夫の「パレミヤ」の講說を組織するに媒介となるものゐ、聖書の此等の個所に於ける神父等の註釋なり。

(に)舊、新兩約の全書なり。新約書ゐ聖堂に於て誦讀する個所を講說し、舊約書ゐ常に奉神禮の際尤も多く誦讀する所の個所を選定して講說すべし。若し說敎者ゐ彼の屢々聖堂に於て講說するが爲に或一聖書を選定し、而して之を聽衆の前に全く講說し終らざる間中止せざりし所の敎會の敎師輩の例に循ひ、牧者たるの熱心を以て作動する時ゐ、何人も說敎者に向て其見識に由て作動することを禁せざるなり。此の如き解釋の最良の儀範となるものゐ、金口(イオアンのマトフェイ及イオアンの

二福音、聖使徒パウロの書札及其他の聖書の講義等是なり。

第十九章　聖書を講明するに就ての注意

聖堂の講座に於て聖書を講明するに、本文の直接確實なる意義を說明し、而して不可思議なる意義の探究に涉るべからず、殊に所謂寓意的の意義を戒慎せんことを要す。但時として聖書の直接の意義を講明せし後、聖書の眞理若くは事件に譬喩的の意義を與へ、若くは其中に何事か聽衆の狀態に適當なる德義上の摸範と發見し得る所の應用的の意義を述ぶることを得、例へば胎蓉を癒すことに於ては（イオアン九章）即ちハリストスの恩寵に依て吾人の心靈上の照耀せらるゝ有樣を宣ぶるが如きこと是なり。然れども斯の如き應用は常に自然たらざるべからず、他の一方より論ずる時は、或眞理を講明するが爲にのみ之を使用すべきも、憑證とするが爲に使用すべからず。又概して最も有名なる說敎家若く

は註釋家の認定せしが如くなさゝるべからず、例へば聖金口の說敎の如きは聖書の應用的の講明を見ること稀なり。是故に直接の意義を講明するは、常に說敎者の主として注意すべき問題たり、而して其應用は唯聽衆の爲に大に敎訓を與ふることを先見する場合にのみ使用せざるべからず。

第二十章　聖堂の講座よりハリストス敎の敎を叙述するの必要及此敎の種類

第一、ハリストス正敎の敎の叙述法を論ず

神言を叙述するには、單り聖書を講明するのみを以て足れりとすべからず、蓋しい）順序次第を逐ふてハリストス敎の眞理を叙述しろ）其中數多の者は特別の細密と事情とを以て個々に解明し、或いは）反對にハリストス敎の敬虔の短簡なる課程を聽衆に授け）に終に種々の場合に應

トて聖書より選ばれたる個所或は書の順序によらず、乃ち事情の要求と、人民の心靈上の需用とに應ト、種々の問題に就て述ぶるを必要なりとす。是故に教會説教の特別なる問題を成立するものは、ハリストス教を述ぶること也、或は又殊更格段なる説教に於て聖書聖傳に基づきハリストス正教の教の組織に入る所の諸眞理、即ち定理、德義、教會の儀式、聖歴史等を述ぶるを以て緊要なりとす。

定理（ドグマ）上の眞理

第廿一章　講説の爲に定理を撰定すべきを論ぜ

（イ）ハリスティアニンに解明せざるべからざる定理上の問題中、最も首要なるものは信經なり。信經は必ずしも各ハリスティアニンの知らざるべからざる者なれども、多くの眞理を短簡に言ひ顯はせるものたるを以て、先づ其通俗の講明をなさゞんばあらず。若し此時説教者の講説する所の眞理として、其多數人の已に知了せるものなりとせば、之を講明するの要なきなり。蓋し敬虔に關する教は、常に空しき俗事の爲に、之を忘却し易きものなるが故に、數々之を彼等の心中に更新せしめざるべからず。是れ其教をハリスティアニンの靈と心とに深く根ざゝしめ、且つ之を堅固にせんが爲なり。然れども聽衆の多數は、常に何處に於ても固く教の首要なる眞理を知らんことを要するが故に、信經に含蓄する所の定理を解釋するは、聽衆全般の爲に最も肝要なりとす。

（ロ）信經の中には、悉くハリストス正教の精神を顯はしたれども、或精密の定理に至ては瞭然其中に含有するとなく、唯其中より抽出さるゝなり。又我正教會に於ては、縱ひ凡ての定理を網羅教訓して漏す所なしと雖ども、聖堂の講座に於て常に完全該博にハリストス教の道理を解明することを得ず、否な講明するの必要を認めざるなり。然れども常に唯

た主要なる單一の定理を授くるのみを以て滿足すると能はず、何となれば個々の定理中「ハリスティアニン」の心靈的德義の生活に至近の應用を有する者亦鮮少なりとせば、例へば聖人を呼祈すること、聖像及不朽体を尊崇すること、逝者を記念すること等是なり。而して是等の定理の屢々偏見、迷信、及妄信の風俗と合するを識らず、或は之を誤解するは、正に「ハリスティアニン」の救の爲に障害なきを得ざるを以て、説教者は、人民の能く之を知り、且つ理解し得るが如く説明せざるべからず。其個々の定理に至りては『殊に常人又は俗事多端なる者の必ず之を知らんことを要せざれども』(壇家持司祭の本文十七章)、時としては亦必ず此等の定理をも解明せざるべからざる事情あり、即ち彼牧者中個々の定理に關して邪説に或はされたる者ある時、或は彼牧者の他宗徒又は岐教徒と親密に交際するよりして斯の如き害毒に染まんことを危懼さるゝ時等とす、蓋し

多少教會より遠ざかる一般の疑惑は、常に危殆なるを以て、最も注意矯正せんことを要す。

(ハ)教會説教の正確なる本原及活動力は、淪亡者の贖罪者たる吾人の主イエスキリストに關する所の教なり。故に説教者は其説教の諸問題をして、凡ての幸福と生命とは常に何處に於ても贖罪者に於けるの贖なり、信仰なりとの主意を貫徹せしめ、且つ教會萬般の教訓は、悉く皆主キリストに基因することを思はしめざるべからず。(壇家持司祭の本分第三十八章參看)

第廿二章　聖堂の講座に於て定理を解明するの規則

説教者は聖堂の講座に於て定理上の眞理を述ぶるに方りて、須らく特別の經驗注意なくべからず、而して此場合に於て欠くべからざる主要なる規則は左の如し。

(い)凡そ定理の本原、即ち其本質は人智の企て及ぶべきものゝあらぎる。故ゝ奥妙なる定理を論ぎる時は、智識より解釋せぎして信仰よりし、智識の爲ゝせぎして信仰の爲ゝ解釋せざるべからず。此場合ゝ於て尤も說教者の努むべき所は、其說明する問題の全く明瞭ゝ達せんことを要せず して、乃ち聖教會が種々の信仰問題ゝ就きて、明瞭正確ゝ教會の教を敘述し、之を詳解するが爲ゝ或定理を規定して、吾人は何を信ぎべきや、又之を如何ゝ信ぎべきやを定めたる所以を宣ぶるゝ在り。斯く聖教會は其定說定義を以て其定理の意義を顯はしたるが故ゝ、說教者たる者種々の「ドグマ」の教義を解明しつゝ、此等の確說定義を確守することを避くべからず。

(ろ)若し或る「ドグマ」上の眞理を講明するのみならず、乃ち之が憑據を要するときは、先づ第一ゝ世々ゝ「ドグマ」の連綿として古きこと、及繼續せしことを確証せんことを要す。蓋し正教會が常ゝ信じ、且つ教へたるが如く憑證する時は、如何なる疑團を倏ちゝして消滅すべければなり。是を以て他種類の證、殊ゝ聖書よりの証、又時としては智識よりの証(假令ひ眞理ハ智識を以て識了するゝと能ハざれども、思想の法ハ眞理と合同するを以て)をも兼用して可也。故ゝ眞理ゝ反對せる迷謬を懷くは、自己本然の常識ゝ背反せる者ゝして、即ち籍身せられたる神子ゝ一旨ありと主張せる僞教等の如き是なり。尤も事情の要求ゝ因ては、或程度ゝ於て論議することを得れども、聖堂の講座に於ては凡て余り精密なる神學的組織の論議ゝ渉り、或は憑證を徵することゝ該博ゝ過ぎ、又は駁擊ゝ渉るが如きは、如何なる場合ゝ於ても爲すべからざる也。

(は)定理は諸方、及諸種の關係ゝ於て、最も敬虔なる思考の問題となることあり、然れども說教者は此等の思考を以て聽衆ゝ好結果を奏せんゝ

は、力めて形而上の論議を避け、殊ゑ定理の實踐的意義ゑ注意せざるべからず。例へば、神は靈なりと云ふことゑ就きて、定理上の敎を說明するときは、聽衆をして靈と眞を以て神ゑ務むべきとの眞理ゑ導かざるべからぢ。是故ゑ定理を講明するゑは、殊ゑ實踐的眞理ゑ直入するとゑ止まるべし。此事ゑ關しては壇家持司祭の本分(職名)中ゑ、信者を聖生及敬虔の信仰ゑ敎べ、且つ最を堅固ゑして智慧ゑ確立すべきことを論述せり(同書第一部廿五章)

德義上の眞理

第廿三章　聖堂の講座ゑ於て述ぶべき實踐的說敎問題

實踐的說敎問題の首をなるものは、十誡、主經、幸福の敎、及敎會法是なり。說敎者は此等の問題及指導ゑ從て講明すべきことは左の如し。

(第一)總て「ハリスティアニン」の品行の精神ゑ關する定義を解明せざるべ

からぢ、何となれば「ハリスティアニン」の生活及行爲の精神を成立する所の事ゑ就きて眞正の定義を有せざるときは、種々の品行行爲ゑ關して、德義上の價値を正しく斷定することを能はざるのみならぢ、往々不善の行爲をも善行中ゑ誤入することあれば也。往昔曾て眞正の敬虔と善行の精神ゑ對する見解を滅却せし「ファリセイ」等の如きは、實ゑ斯の如く迷亂せり。加之、現今ゑ於ても亦善行の本質を理會せざる人々は、猶斯の如き錯亂あるを免れざるなり。又他の一方ゑ在ては、「ハリスティアニン」の行爲を更新すべき種々の場合及事情の生活中ゑ顯はるゝ諸の規則は、悉く之を記憶することを能はざるもの也。然れども「ハリストス」敎の誡命の心髓を了得したる者は、余り精密なる品行上の規則を要せず。而して「ハリストス」敎の律法の心髓を自得せんゑは、其律法ゑ練習して、一定不變の規定を成遂ぐるゑ在り、蓋し吾人は正しく神誡を成遂ぐるゑ從ひて、吾

人の良心は益々光明となり、德義の感情は彌々活潑怜悧なる者となれば也。然れども心靈上の實驗は、何人も亦突然に得らるるものにあらざれば、「ハリスティアニン」の行爲の基礎を全成するものゝ何ぞや、又外面に現はれたる善行に活氣と勢力とを與ふるものは何なりや、且つ神前に於て如何に吾人の正義を判するかを明瞭に示さゞるべからざ。

(第二)神に對し、近者に對し、及自己に對する「ハリスティアニン」の本分を個々に解明せざるべからざ。此等の問題の重要なるゝ言を俟たずして明なり。個々の善行及惡癖に關しては精密に正教訓蒙に於て訓誡教示せり。又被牧者の德義の狀態及其外部の位置、並に彼等の性質及習慣を主宰する所の生活、分限の狀態等ゝ、牧者をして熱心に善行と之に反對なる惡癖に關して屢々述ぶべきことを指示す。

第廿四章　聖堂の講座に於て德義上の眞理を解明するの規則

德義上の眞理を述ぶるに當りて、說教者の注目すべきことゝ左の如し。

(い)凡そ德義上の教ゝ、正教定理の教と相密着して、其本原たる定理の上に確立せざるべからず。若し否らざるときゝ、自然ハリストス教にあらざる德義上の教とならん。例へば今忍耐の事に就きて、唯忍耐力の必要なることのみと述べ、或は忍耐することは不忍耐者に忍耐力を養成する所の德義上秀越せるものなることのみと述ぶれば、此善行に關して唯「ストイク」の教(人の德義を殿守するハ德義法の爲に又ありとの主義を持する一宗派)を述ぶるに過きずして、ハリストス教の教を述ぶる者には非る也。蓋しハリストス教の忍耐は、徒らに地上の不幸を忍耐する所の勞力にあらず、乃ち吾人の主イイススハリストスの誡命と模範とを以て、吾人に勸告せられたるハリストスの十字架に親與するにとなり、苦難に於て彼と合体する恩寵の慰籍なり、主と共に天父の國を相續する希望と合するものなり、神の恩寵を

以て固めらるゝ者なり、且つ常に「ハリスティアニン」の力を超過せざるもの也。（マルク八ノ三十四、エウレイ十二ノ一、二、ロマ八ノ十七、コリンフ後書一ノ五）

（ろ）徳義上の眞理は大抵平易にして、其一般の点に至りては、殆ど各人の知る所のもの也。例へば、人誰か神と近者とを愛すべきことを知らざる者あらん、又自愛、利己、妄誕、強奪、譏誣等の惡事たるを知らざらんや、如何なる聽衆も、斯の如き種類の眞理は證するを待たざると明なり。然れども吾人は此等の眞理を知れるが爲に、此等の眞理は却て殆ど吾人の行爲に感化なくして吾人に止り、且つ吾人は常に此等を破壞するも、毫も之を認めざるものゝ如く、或は之を認むるも、己の不義なるが爲に、深く良心の責責を感ぜざる也。故に說教者は一方より聽衆の生活に對して徳義上種々なる誡命、規則の適用を示さんことを要す。是れ可成各人をして、何時、如何にしてハリストスの或誡命を破るかを明かに知らしめ

んが爲なり。他の一方よりは、啻に善行の規則を敎ふるのみならず、之を成遂ぐるに奬勵せんことを要し、且つ惡癖善行を其本然の形勢に於て表はし、及吾人をして自然に適當なる感情を起さしむる所の狀態に顯はし、而して之を敎ふるよりは、寧ろ勸化せんことを要す。此規則に對して最も粗漏の錯誤を生ずることあり、例へば自己の前に富者なきにも拘らず奢侈、富厚に對して叙述し、或は聽衆の中に如何なる種類の富者ありて、其富を濫用するかに注意せず、或は自己の前に裁判者の居らざるに、裁判の不義不當を攻擊し、或は自己の前に俗人なきに、世俗の滿足に對して述ぶるが如き是なり。又或實行の眞理にして證據を待たざるも充分明晰なることに全力を盡して論證することあり、されど斯の如き眞理は、之を示すに止り、之が徵証を要せず、即ち其要点を指摘して善行若くは惡癖の狀態を顯はし、及善行に對するの愛を喚起せしめ、且つ努

めて惡癖を避くることを敎示すべし。

（は）人若し或眞理と知るも、其如何に實行すべきやを知らざれば、之を實行するが爲に奮勵し、若くは之に準備するも、曾て其効力なきものなるが故に、說敎者は能く德義上の誡命規則を成遂ぐるの方法を示さんことを要す。例へば聽衆をして敵を愛せよてふハリストスの誡を遵奉せしめ得るものと假定するも、若し預め之に反對なる情慾の攻擊に對して誠心するにあらざれば、此注意は竟に望むと能はず。吾人は始め仇敵より耻辱を受くるに當りて、斯の如き場合に於て如何に處置すべきかを知らざれば、吾人は、吾人に對する惡言暴行を以て辱かしめられざらんと斷定せし最初の決心を全く忘却するに至らん。斯の如く善行の方法に關する敎は、道德上重大なる一問題となるべきものなれば、自然說敎者より心靈的生活に大なる經驗を要すると明けし。嘗て敎會の聖師

父等が此の如き敎を述べたりしは、是れ皆自己の經驗に依て言ひし者にして、苟且に想像したる者にあらず、蓋し閑時に於て想像せる方法は、自ら己を矯正するに望なければなり。然れども說敎者若し自ら充分なる心靈上の經驗なき時は、敎へらるゝ者と共に此等を自己に應用し、且つ「ハリスティアニン」の生活に習はんことを敎へつゝ、經驗を以て他人を利益すべし。

（に）眞正「ハリスティアニン」の生活は、其終生間漸々にも達せざるべからざる完全高尙なる理想なり。此「ハリスティアニン」の生活は、其當初甚だ困難にして、特に肉の生活に慣習したる人の爲には、驚くべきものなるが故に、說敎者は務め先づ靈の內部の情態に至近にして、且つ聽衆の世態に最近なる實驗的眞理を前置せば、即ち過誤なきを得ん、蓋し斯の如き眞理は、明かに良心の內部の平和と外部の安全とを佐くる者なればなり。

かくの如くして后(ハリスティアニン)の德行に關する敎、例へば隱蔽せる邪惡の制禦よ就て、聽衆が野鄙なる口腹の希望を制禦するよ慣習せざる時ハ、果して如何よ之を述べんとする乎、又彼等ハ日常私祈禱の義務を果さゞ、或ハ之を致すことを欲せざる時ハ、如何して能く彼等よ祈禱することを敎ふべき乎、等の如き問題を解明すべき也。かの常人といへども其種子を播くよ當てハ、必ゞ田畝の肥瘠と時の適否とよ差別なくして妄りよ之を投せゞ、況んや心靈的の種子を播く者よ於てハ、之が特別の注意なくして可ならんや。

儀式上の眞理

第廿五章　聖堂の講座よ於て解明すべき儀式上の眞理の問題

人多くハ正敎會の儀式的奉神禮の壯嚴美麗なるを知ると雖ども其內部の意義を了解する者亟と罕なり。甚たしきハ敎會の神聖なる儀式を

見るも、自己の無學なるが爲に、全く儀式の存する所以を知る能ハゞして、之よ想像的の意味を附會し、或ハ自己の淺見なるが爲に、之を見るも、特別の意義なしとする者あり、是れ眞正なる儀式に關して、或ハ妄心を起し、或ハ奉神禮に冷淡を生ゞる所以なり。總て無敎育の人民ハ、天然而上のものなき所に、却て天然而上のものを見るに傾き、半開明の人民ハ、屢々奇蹟及神の能力のある所に、之を觀察することを欲せざるもの也。而して奉神禮よ參與して放念退屈等の生ずる所以ハ、敎會奉事の意義及順序と知れる者の少なきに由る。蓋し聖堂よ於て見聞する所の事よして毫も之を理會せざる時ハ、自己に敬虔の感情、及熱切なる祈禱を捧ぐるの性情を有すると難けれバなり。故よ今聖堂の講座より解明すべき儀式的奉神禮の事項を擧ぐれバ左の如し。

(い)一般よ儀式的奉神禮の必要なると、其高尙の價値あると、及其嚴肅な

るとを解釋せざるべからず。其必要なる所以ハ、蓋し体ハ靈の爲めゝ存するゝと同じく、儀式的奉神禮ハ信仰の爲ゝ存するを以てなり。其高尚の價値あるハ、蓋し聖なる儀式ハ信仰の精神の盛大なりし時代、及儀式的奉神禮の創立者等が正しく心靈的と物質的との關係ゝ通曉して以て心靈上の事物ゝ尤も適當なる外觀的の樣式を與ふることを得、及與へし所の教會の最も多幸なる時代ゝ於て設立せられたるゝ因る。其嚴肅なるハ、蓋し「ハリスティアニン」の風を開發するゝ於て、何ものも教會儀式を沈思して其深意を認識するが如く心を神聖ゝし、之を眞實に美麗ゝ、且つ活動的ゝ養成せざれバ也。

(ろ) 奉神禮の諸の組織、順序、意義、及其所屬物を詳解せざるべからざ。若し晩、朝、晝の奉神禮、聖堂及其他の場所ゝ於て執行せらるゝ諸の禮儀、作法、奉神禮の際に使用するが爲ゝ聖質を受くる所の諸種の物件等ハ、牧者

が適當の熱心と經驗とを以て、之を衆民ゝ説明する時ハ、最良なる教化的説教の問題たるゝとを得べし。

(は) 諸種の奉神禮中、殊ゝ神聖なる聖体禮儀の組織、順序、及意義を解明せざるべからず。凡そ人類救贖の神聖なる經綸ハ、救世主の十字架の死これが中心となるが如く、教會の諸奉事ハ聖体禮儀に於て無血祭を執行するの側に歸着するなり。聖堂ゝ於て毎日執行する其他の諸奉事ハ、聖体禮式に關してハ、唯預備若くハ收結の奉事たるゝ過ぎざ、故ゝ聖体禮儀ハ、説教の爲ゝ如何ゝ重要なる問題を成立するやハ言を待たざして明なり。牧者若し人民が聖体禮儀の事實を誤解して適當の熱心なく、敬虔なきを洞觀する時ハ、聖体禮儀ハ如何に行ふや、何の爲ゝ行ふやを人民の前ゝ説明することを勉むべし。否らざれバ説教者ハ必ず自己の靈ゝ重罪を受けん。

第廿六章　奉神禮の諸問題を述ぶるに就きての注意

聖堂の講座に於て儀式的奉神禮の問題を述ぶるに當り、宜しく先づ辨別すべき事實は左の如し。即ち(い)機密を解釋するに、教會及び全地公會師父の指導に循ひて、專ら機密の有る所を究め、而して毫も之に隨意の想像決定を許容すべからざる(ろ)奉神禮の際用ふる種々の物件に就き歷史上の研究をなさんとする聽衆の必ず知らざるべからざる事實と、之を知りて利益ある場合に於てのみ其起原を説明すべきも、之が必要なき場合に於ては必ず茲に説き及ぼすべからざる。而して奉神禮と解釋する德義上の目的は、總て他の歷史上、定理上、機密上の目的に超過せざるべからず。

聖歷史上の眞理

第廿七章　聖歷史上の眞理の首要なる問題

聖堂の講座に於て解明すべき聖歷史上の首要なる問題は左の如し。

(い)普通歷史上の事件、及其現象の基原、若くは中心となるべき聖歷史上の最大重要なる事件、假令ば、世界及人類の創造、太初の祖先の情態及其墮落の形狀、全世界の洪水、眞教を保存するが爲にエウレイ民の選ばれしこと、及救世主の降臨前エウレイ人民の歷史上重大なる時代、新約教會の基原及其蔓延等是なり。而して説教者は此等の事件を述ぶるに簡略快活にして、神の世界經綸の圖式及「ハリスティアニン」に高尚なる思想感情を惹起さしむる所の觀念を象り、且つ「ハリスティアニン」の眼目をして大抵生活上有限的の見解に向はしむる日常の現象及出來事より脫離せしめつゝ、其理想を發輝し、其智慧感情を敏捷ならしむべし。

(ろ)全地教會の讃頌する所の聖なる「パトリアルフ」(列祖)、預言者、使徒、致命者、主教、其他諸聖人の傳記なり。此の傳記中に、吾人の教訓となるべき

との多きゝ喋々するを待たざる也。例へば家族の生活上質朴温和なるとゝ就てゝ、古代「パトリアルフ」の性質、作業、品行の傳記ゝ勝るべき家族生活の功德を摸寫したる者なく、又使徒等の摸範ゝ勝るべき活々明瞭なる「ハリスティアニン」の愛の精神及性質を顯ゝしたるものなし。又牧者ゝ彼牧者の命名せられし聖人、若くゝ聖堂建築の時ゝ於て命名せられし聖人を、其傳記の時日ゝ從ひて述ぶるを可とす。

(は)殊ゝ神人、及其至淨なる母の傳記なり。例令ひ日常聖堂ゝ於て福音の歷史を聽聞するも、其聽聞する所ゝ僅かに或る一部分に過ぎざるが故に、「ハリスティアニン」たる者宜しく吾人の主、救世者の地上生活の詳細なる歷史と知らざるべからず、而して說敎者はイエスハリストスの地上生活を述ぶるゝ當てゝ、學術的の研究をなすべき必要もなく、又一福音と他福音とを比較して、諸事件の時日及場所を正しく附合配當せん

とするが如きゝ、說敎者の目的を達するに必要なるものにあらず。說敎者の當ゝ務むべき事ゝ、主ばら其說敎の平易と簡略とゝあり、即ち學術的の研究に涉らずして、最も福音の本文に近く、福音の言語を以て描寫せんとを要す。何となれば學術的の研究ゝ、毫も說敎ゝ敎訓を增加するものゝ非ずして、却て其敎化力を害するものなれば也。至聖なる生神女の生活に關する歷史上の報告ゝ、猶福音より汲得するが如く、亦諸師父の著作ゝ記載せる傳記より汲得すべし、例へば諸聖傳記中なるアレオパグの聖デオニシイの一書札の如き是なり。

第廿八章　聖堂の講座ゝ於て聖歷史上の問題を使用するを論ず

聖歷史上の問題の說敎ゝ二種類あり。

(第一)聖歷史を課程の狀態に說敎することなり、茲ゝ尤も注意すべきものゝ、聖歷史上の事件若くゝ行實を、聽衆の充分に知り得べきが如く完

備詳細に解釋するゝ在り、又叙述する問題を實際應用するゝ關しては、乃ち注意及短簡なる推論の狀態に於てすべし。聖歴史上の問題に就き斯の如き說話法を用ふるゝ、此等の問題を、次第を逐ひつゝ叙述する時を以て最も適當なりとす。

(第二)或事件行實等よつきて考察熟思の狀態ゝ說敎するとあり。斯の如き有樣を以て說敎する時ゝ、其事實ゝ單に說敎の主眼となるものゝよして、之を詳說すれば、他の事實、殊ゝ歴史上の事實を以て實行の眞理と解釋する也。此の如く歴史上の問題を述ぶる時ゝ、其說敎は聖堂講座の爲ゝ、常に一層の便益ありとす。

增補問題

第廿九章　聖堂の講座に於て增補問題を述ぶるの主要なるを論ず

增補問題ゝ、說敎の首要なる材料より採れる定說を解明するに當りてゝ、證據及勸說の方法として敎會說敎の組織中に編入することを得。然れどもこれ增補問題が聖堂說敎の特別問題たることを得ざるを云ふにあらず、即ち增補問題中ゝ必ずハリストス敎の或定理、若くは德義の眞理を含蓄せざるべからざるを云ふなり。若し否らざる時は、聖堂說敎の首要なる目的と一致せざるを以て、之を聖講座に於て解明すると能ゝゞ、總て增補問題の範圍より取れる說敎の材料ゝ、日常聖堂說敎の材料となす可からず、されば特別の問題は唯特別なる事情の要求ゝ應じて之より取らざるを得ざるなり。

第三十章　增補問題の首要なる種類

此種の問題ゝ左の事實より採ることを得べし。

(い)博物學、即ち万有より取ること是なり。何となれば凡そ見ゆる所の萬

有ゝ、聖書と同ト く世界の創造者其者に就きて證する神啓の書冊にして、智慧と感情の爲に必要なる諸眞理を表明すればなり。然れども其眞理を表明するゝ、言語に於てせずして其存在と現象とを以てす、蓋し古代の預言書、福音及諸使徒の書札、並ゴ教會の聖師父等の書中にも亦萬有を解明し、或ゝ萬有を以て解明せられたるもの甚だ多ければ也。又自然的の問題として解明し得る者ゝ、即ち(ア)自然教及天啓教の一般の眞理、即ち神の存在、其性質及神の照管、人の不死等の問題の如き(イ)ハリストス教特有の眞理、仮令バ、人類の墮落及更新(ロマ書八ノ十九至廿三)死者の復甦(コリ前書十五ノ三十五至三十八)信者のハリストス救世者と合体すると(イオアン十五ノ一至八)の問題の如き(ウ)德義的生活の特別なる規則(箴言六ノ六至九イサヤ一ノ二、三以下)等是なり。所謂自然的問題ゴして人民の爲ゴ自ら特別の解明を要する者ゝ左の如し(一)奇變異常なる驚くべき現象、譬へゝ、日蝕、慧星の現出、地震等の如

き(二)總て人民をして妄信的の恐懼、若くゝ妄心的の尊敬、妄信的の好奇心、若くゝ恐怖心等を生せしむる所の者是也。此の如く說教者ゝ自然的問題を解明しつゝ、一方よりゝ、人民の敬虔を妨げ、其安寧を害する種々の妄信を根治し、他の一方よりは、ハリストス教の諸眞理を表彰顯明ならしむべし。

(ろ)普通歷史より採ること是なり。總て說教者ゝ全世界の最も重大なる事件、諸國民の宗教史、哲學史、科學史ゴ注意する時ゝ、ハリストス教の眞理を闡明憑證するゴ助くる材料を發見し得べし。而して斯の如く諸史を使用するの例ゝ、師父等の說教中に多く散見する所ゴして、近世ゴ於ても亦稀ゴ普通歷史の範圍より取れる問題と使用することあり、而して之を正當なる範圍ゴ於て使用する時ゝ、聖堂講座の爲ゴ常ゴ妥當ゴして、且つ甚だ裨益ありとす。

(は)生國の普通歴史より採用し、又詳細なる生國の歴史をも聖堂説教の組織中ゝ編入することを得。蓋之を以て愛國心を興奮し、併せて子孫ゝ遺傳する祖先の敬虔の感情と、善良なる精神とを養成し得ればなり。(ゝ)當代の事件より採ることを得べし、但し其事件とゝ重大にして且つ教誨となり、及政府より一般公衆ゝ述べられたる事なり、或ゝ殊に著名なる人々の生活の事件より採ることを得べし、但し其事件中ゝ功德と「ハリスティアニン」の敬虔の教誨とを顯すものゝ止まる。

第三十一章　增補問題を解明するゝ就ての注意

聖堂の講座ゝ於て增補問題を述ぶるゝゝ左の規則を守らざるべからざ。

(い)學術的の研究若くは穿鑿ゝ渉るべからざ、唯學術の準備せる結果を利用するを以て足れりとすべし。されば預言者及其他捧神者等に語り

し神の神ゝ、万有ゝまれ、歴史ゝまれ、之を詳解することを勸説せざりしかど、万有と歴史とを以て証する所の眞の信、望、愛の傳道を勸告したり、又如何に至善の傾向あり、如何ゝ最良の所得を有する學術と雖ども、悉く之を以て聖堂の講座に提出するを得ざ、其然る所以ゝ、第一、之を理會するゝゝ、多少の準備を聽衆より促すゝ由り。第二、殊ゝ「ハリスティアニン」の心靈的生活ゝ、毫も該博複雜なる學術的智識の感化に由て得らるゝものゝあらざして、乃ち神と世界と人とに於ける福音道の眞光の下ゝ傾向せられ、養成せられ、發育せらるゝゝ由れべなり。故ゝ世の學術の如何に進歩するも、智識の如何ゝ發達するも、神言ゝ、常ゝハリストスの世界ゝ於て同一且つ不變なり、學術上の種々の發見ゝ、唯神の世界ゝ於て吾人の靈生ゝ至近の應用を有する時のみ之を利用するゝ過ぎざ。蓋し神の堂ゝ、地上教育の學校たるべからざれべなり。

(ろ)又描寫及講話に於ては、力めて精密に失することを避け、唯問題の特点を顯はさゞるべからず。常に歴史上の講話をなすに當ては、多少興味ある綿密と、多少人心を収引する所の万有の繪畫とは、僅かに或好奇者に のみ滿足を與へ、或は其感情に壯快なる一種の刺戟を生ず、或は不正の感覺をのみ惹起すことあるも聖堂の講座に於ては斷じて用ふべからざること也。

(は)聖書が吾人に万事を視ることを教ふるが如く、万有と歴史とにある萬事を視て、之に聖書の特質と調味とを與へざるべからず。

諸種の格段なる説教問題を論ずるを論ず

第三十二章　聖堂の講座に於ける説教問題を配賦するの肝要なる説教問題の浩瀚にして各様なるに隨ひ、聖堂の講座に於て豫め何時如

何なる事實に就て述ぶべきかを知らざるべからず。是れ説教者が種々の場合と事情とに應じて能く問題を配賦適用し、以て自己の爲には何事よりまれ凡そ人民に裨益ある神旨を述ぶべき(使徒行傳二十ノ廿、廿七)自己の因難なる本分の負擔を輕くし、又被教者に對しては、時と事情とに應じ、大に之を教誨訓導しつゝ、最善の進歩を以て作動せんが爲なり。

第三十三章　諸の場合と事情とに應ずる説教問題を撰定するの諸点

聖堂の講座に於て何時如何なる事を述ぶべきやは、精細に指定すること能はず、何となれば説教者は其遭遇する所の凡ての事情を悉く先見すること能はざれば也。然れども牧民的業務の事情に應じて述ぶべき問題に就きては、或問題若くは其一般の注意たりとも、預め之を指示するは、敢て無益の業に非ざるなり。此關係に於て諸種の説教問題を撰定する

所の要点ハ左の如し、(第一)教會の種々の時機、(第二)教會及其信徒の諸の事情(第三)公私の種々なる偶然の現象、並ヨ説教者自らの種々なる狀態、位置等是なり。

何れの時に於ても至真なる説教の善美なるハ勿論なれども、其意義にして、若し時と事情とに適する時ハ、大なる價値と感化とを有するや疑なし。爰に左の事を認むるハ一層必要なりとも、即ち斷然説教に如何なる順序をも立てずして、ハリストス教の信仰と德義上の眞理を授くるハ極めて困難なり、又吾人ハ特別の必要なき或問題を數々反覆することあるも、或問題に至りてハ、却て其重大にして且つ聽衆の應用上甚だ肝要なるにも拘らず、其勤務中一回だも之を説明せざるが如きハ、宜しく戒むへきことなり。

(甲)教會の時機に適當なる説教問題

説教者ハ教會の特別なる時機ヨ於てハ、必ず公衆に對して神言を講せ

ざるべからず、所謂教會の特別なる時機とハ、(ア)主日(イ)諸祭日、即ち挿入週間、祭前祭後の週間を有する主、神母、無身の万軍、及神の諸聖人を讃揚するの祭日(ウ)諸齋日、就中准備週間、及受難週間を有する四旬齋是なり。

第三十四章　主日の説教問題

主日即ち順序的週間の説教問題となるべき者ハ左の如し。

(イ)啓蒙的若くは組織的の順序にハリストス教を序述することなり。此場合ヨ際して或困難不便を感ずることありと雖ども、事業に對して眞正の熱心を有する時ハ、よく其困難に打克ち、よく其不便を排除することを能ハざるにあらず。而して此場合に現ハるゝ不便利とハ何ぞや、即ち聖堂の講座に於てハリストス教の諸教理を順序的ヨ述ぶるが爲め、牧者が週間に於ける課程の甚だ稀なるを以て、一ハ斯の如き課程を全く講説し終らんヨハ、甚だ多くの時日を要することと、一ハ順序的説教と週間に

於ける説教とを交々遅延して授くるが爲め、自然聽衆の記性中に問題の接續を保存せしむると甚だ困難なるのことなり。然れども此等の不便利を除去するに、(第一)説教の最重要なる問題のみを述べ、及可成的簡約に述ぶるに在り、否簡約に述べざるべからず、蓋し細密に問題を解釋し、之を叙述するが爲に、特別の時あれば、(第二)説教の始に於て可成的明瞭に説教全体の順序を言ひ表はし、然る後屢々繼續する説話の始に於て、前に述べたる説教の大体の意義性格を復言し、以て一の説教を他の説教と連接せしめ、且つ常に聽衆の記性中に於て既に順序によりて授けられたる眞理を更新せしめざるべからず。又他の不便利とは、即ち一週間の日に當る諸の祝賀、祭典、若くは彼牧者の方よりして顯るゝ或偶然の事情は、説教の爲に特別の問題を示しつゝ、牧者の順序的課程を中絶して其説教の順序を破るおとある是なり。然れども此等

の困難をも亦容易に排除するの方法あり、即ち時に偶然なる問題及日常問題にして、之を除去することを得ざる程重要なる者にあらざれば、全く休講するを得ることなり。然れども特別の教誨を順序的説教、及偶生の事情の要求に適應するを得れば、固より之に優ることなしと雖ども、尚一の最良の方法あり、即ち一を「リトゥルギヤ」の時に述べ、一を他の奉神禮の時、即ち徹夜禱、若くは早課、若くは時課に於て述ぶるに在り。勿論此の如きとは、假令ひ説教者自身より特別の困難を催促することあるも、斯の如き困難を避んとするが如きは牧者のなすべからざる事にして、且つ聖堂の講座よりハリストス教の眞理を並べ述ぶるの必要よりして利益あるや明なる事實なり、而して諸眞理を並べ宣ぶるの必要なる所以は、其相互の關係を知るに、至て便利確實なるに在り。尚又互に至近密着の關係を以て、萬事を總合せらるゝハリストス教の眞理に就きて

述べざるべからざるに、故に主日を以て專ら不斷の接續、順序によりてハリストスの正教を衆民に授くるに供せざるべからざるに。而して又各牧者に先づ其勤務の初年に於て自己の爲に必然の本分として之を規定することを得るなり。

(ろ)前章既に論ずたるが如く(第十八章參看)舊新両聖約書中より誦讀に示定したる時に應じ、日々の誦讀に制定せられたる章句を順序によりて解釋すること、或に説教者の或特別の目的に準じ、其撰擇に因て全書を解釋するとなり。而して聖堂の講座より精密にハリストス教を宣べたる後、誦讀に定まれる聖書の問題を叙述するは、主日説教の良法たるに爭ふべからざる也。

(は)聖書の日々の誦讀、及総体に説教問題の範圍より採れる諸種各個の眞理なり。主日に於ても種々の説教問題に富めるに係らず、説教者に

聽衆の或特別なる事情、若くは眼前の要求の、諸問題に就きて説話するの發端を彼等に與へざる時に、之れが爲めに其材料を撰擇するに困難を認むる者多し。然れども此困難たるや、一に事物に不正の見解を下すより生ず、一に機械的に事を作動するより生ず、換言すれば通常平夷の事實にして聽衆に了解し易き事を述ぶるを恥ぢ、却て特別なる事實を穿鑿して聽衆を喜ばさんと欲し、或は眞理の寓する所を悟らずして、濫りに表面的に種々の見解を下すあり。思ふに彼等が往々説教の爲に妥當なる材料を發見せざるに此が爲なり。抑、説教の主眼にして當に慮るべきものに、決して高論放言をなして徒に愉快を博せんとの主義にあらざるは勿論にして、其要とする所は一に聽衆を教化するに在り、他の一方よりに遭遇する所の眞理を輕卒に看過せず、深く此眞理を熟思し、且つ能く之を感情に銘記することを慮らざるべからず。實に説教中述

ぶる多くの眞理ハ、聖堂の講座より再三再四復言するあとあるを以て、多少教育ある者、若くハ己を開明人と思惟する聽衆の爲よハ著しき効力なきものとなれり。されバ此の如き人民より得易すからざる所の注意を喚起するよハ、時よ或ハ特別なる問題を撰び、時よ或は斬新の說なりと思惟する所の点より顯ハすハ決して惡しきことよあらず。然れども唯能く其問題よ注意せんことを要す。「ハリスティアニン」中多くの者は唯ハリストス教眞理の概畧のみを知れるが故よ、其個々の特点を啓發して之を指示せさるべからず、加之、實際首もなる問題も卓見なくして其緊要便利を述ぶる間は、果して重要の問題なりとは思はれざる者なり。是故よ能く說教の爲よ撰定せる各問題を自己よ應用し、且つ此問題よ就き智慧と感情との承服よ從ひて述べざるべからず。以上叙述せる所の規約を履行する時は決して前よ指示せるが如き困難を現出し、或

は困難よ陷ることあらざるべし、例へバ財貨に眷戀する者よ對して施濟の事を述べ、或は仇敵を愛すべきこと等を戒むるが如きは、普通一般の問題なりと雖ども、聖金口、大ワシリイ、其他諸師父の說教中よは、此等の問題よ就て、富裕なるハリストス教の教誨と宣べざるも、其興味感動あると果して如何許ぞや。

第三十五章　教會祭日の說教問題

教會諸祭日の起原は、古來の歷史よ由來して、或定理上若くハ德義上の眞理と有する者なり。是故よ諸祭日よ於ては、祭日の歷史、及其中よ包含する定理、若くハ「ハリスティアニン」の生活上の規則を述ぶるを以て至當なりとす、之を詳言すれバ左の如し。

(い)主の諸祭日は大抵皆福音の事件よ由來せるを以て、其歷史は多少各人の耳よする所なり。而して教の最も首要なる定理、例へバ主の籍身、洗

禮、復活等は歴史と合するもの也。斯の如き定理を最も細密に解釋するは、祭日に於ける聖堂説教の適當なる問題たり。次に此諸祭日の起原となれる種々の事件は、皆説教の爲に最も教訓となるべき好材料にして、例へバハリストス降誕の事情、即ち主の洞窟に誕生せしこと、神使の讃詞、牧者の來拜、博士の旅行、及ワイフレームに到着せしこと等是なり。終に正教會は救主地上生活の或事件を以て、其吾人の爲に行はれたる聖務を近接せり、例へバ主の洗禮と共に嘗て主がイオルダン河の水を聖にせしが如く、水を聖成すると、主の迎接祭は吾人の献堂を近接する等の如し。此等は皆主の祭日説教の爲に時日に適當し、且つ教訓に富める諸問題を與ふるもの也。

(ろ)生神女の諸祭日は、特に聖なる傳記に記載し、若くは人民の年代記に記録されたる事件に基きて正教會の設定せる所なり。是故に其歴史は

啻に教誨となるのみならず、殊に正教會の熱心なる保護者を讃揚感謝すべき祭典の歴史上の事實は、數々諸人の爲に耳新らしきとあり、而して生神女祭に關する聖堂説教の最良の問題は、左の教に汲得せざるべからず、即ち神母の無玷童貞なると、其威嚴の諸造物に卓絶して曾て比類なき事、其行の最も高尚善美なると、例へバ謙遜、順從、及其他眞の信仰と敬虔の希望とを以て、彼の守護を仰望する衆庶の爲に不眠の傳達をなすこと等是なり。此等の諸教は、總て其材料の活動的にして能く言語を以て盡し能はざる程信者の靈に歡喜を與へ且つ經驗及證據に富めり。

(は)天の無形の萬軍を讃揚する祭日には、凡そ神使世界のこと、及神使の吾人の世界に於ける關係、特に吾人ハリスティアニンの守護神使のことに關する聖書と教會の教とより吾人に知れ渡りたるおとを述ぶべし。

（ヨ）諸聖人の祭日説教に於ては、特ヨ眞正ハリスティアニン」の德行ヨ關する教誨を與へざるべからず、何となれバ聖人の生活は「ハリスティアニン」の功德の生ける、且つ了解し易き課程なれバなり。聖人が吾人に與ふる數多の善例中ヨは、聽衆の靈の特別なる狀態と、其生活の格段なる事情とに循ひて、各人の爲ヨ摸倣そべき諸点を發見し得ると難からず、蓋し諸聖人の中ヨは聖福音書中ヨある所の眞理ヨもあれ、善行にもあれ、ハリストス教の德義法、社會上及家族の本分、並ヨ敬虔なる生活の摸範ヨもあれ、悉くハリストス教の德行を實踐し、而して自己の身体の證據を以て此德行を明顯せし特別なる人品、特別なる性質、格段なる代表者を有せざるおとなけれバ也。又茲ヨ諸聖人の生活の簡短なる傳記を述ぶるを必要なりとす。然ども其傳記は純乎たる實驗的、即ち實際の善行を顯いさゞるべからぢ而して諸聖人の祭日ヨ定理を述ぶるも亦大抵實

驗的より顯はさざるべからぢ。凡そ教會は諸聖人の祭日の外ヨ、諸聖人一般の祭日を設立せるを以て、殊に此日ヨ於ては、一般ヨ諸聖人を尊敬し、及之ヨ摸倣すべきと等を説話するを至當とす。

教會は最も著名なる祭日を圍繞するヨ挿入週間を以てせり。挿入週間六あり、即ち昇天祭前後、降誕祭前後、顯榮祭前後等是なり。聖教會は斯の如く規定して以て、説教者ヨ此等の時日内ヨ於て一の祭日説教中ヨ許多の趣意を合せ述べぢして、其祭日ヨ含蓄する所の教を精密ヨ述ぶべきと明瞭に理會せしむ、然れど此祭日説教い時として簡略ならざるべからず。

第三十六章　齋日の説教問題

ハリストス正教會は祭日ヨ妥當せる齋を適用配賦せり。而して齋の時は殊ヨ講すべき特別必然の問題を説教者ヨ指示す、例へバハリストス

降誕祭前の齋ゝ於ては、人類を救世者の降臨ゝ準備せしと等を述べ、ペートル齋ゝ於ては、聖神の恩寵、並ゝハリストスの恩寵の敎を地上ゝ弘布せし聖使徒等の功德等を述べ、生神女就寢齋ゝ於ては、最も讃美すべき生神童貞女の生活の狀態及其高德なること等ゝ就て述ぶるは甚だ時機ゝ適するなり。諸齊中及全年中ゝ於て准備週間と受難週間とを有する聖四旬齋は、牧者の說敎するが爲ゝ便宜ゝして且つ首要なる時日なるを以て、其問題甚た夥多なりと雖ども、此時に當り說敎者が敎會奉事の指示ゝ從ひ、特別ゝ注意すべき重要なる問題は、即ち左の如し。

(ア)齋の事、即ち齊の緊要なる事、其性質及其効力あること等の敎なり。『此等ノ敎ハ最モ該博ニ且ツ細密ニ述ベザルベカラズ、蓋シ現今ノ時勢ハ古代苦行ノ行ハレシ時勢ニ反スレバ也。而シテ齋及內部的苦行ニ就キ嚴格ニシテ明瞭、精密ニシテ强力ニ叙述シ、以テ後者(現今の時勢)ヲシテ

前者(古代の時勢)ノ上ニ確乎タル過重ヲ與フルハ說敎者ノ本分ナリ』(敎會文學第一部)。此敎は准備週間ゝ述ぶるを可とす、或は晩くも此週間の主日より始ざるべからず、此れ其奉事の特別の意義ゝ障害せざるのみならず、却て其解明を助くものなれバなり。又乾酪週間ゝ於ては、殊ゝ大齋ゝ入るの前に於て不節制なる頑固の惡習ゝ反對する目的を以て盡力せざるべからず。

(カ)痛悔及聖體機密の敎なり。蓋し齋ゝ唯可成的適當ゝ此等の大なる救贖的の機密を領くるゝ准備するとなるが故ゝ、齋の中、特ゝ齋の第一週間ゝ於て、精密に且つ殊力を盡して機密の事を述べざるべからず。牧者ゝ痛悔及聖體の二機密ゝ就き一般の敎を述ぶるを以て滿足せず、乃ち此等の機密を領くるの準備者ゝ、之を領くるに先ちて、尙種々の敎誨を授けざるべからず。此種の問題ゝ(い)痛悔前自ら己を反省するとなり。之

を詳しく言へば、痛悔者が神父の前ゑ出づるゑ先ちて必要なる者ハ何なる乎、又如何ゑせバ可なるや、可成的完全且つ公正ゑして、以前の痛悔より當時ゑ至る間の自己の行爲を觀察し、而して何時、如何に、彼ハリストスの誡命を破りし乎を追想せしめ、自己の良心を穿索し、其良心ハ眞ゑ罪より自由ゑせられ、自己ゑ神を敬畏するの心と、救世主の前ゑ自己の犯罪ゑつきて痛心を生ぜるの希望を有する乎等是なり。(蓋し多くの人は毫も自己を反省せずして痛悔機密を領くるが故に、徒ゑ神父の問詞に答へ、而して其答辞も亦唯表面的ゑして、神と其聖務者との前ゑ何事を告ぐるかを知らざる也。眞正なる「ハリスティアニン」の痛悔、豈ゑ斯の如きものならんや。)(ろ)痛悔者の行ゑ就きての問題なり。是れ機密ゑ於て行はるゝ所のことを、儀式上ゑ於て、敬虔と全き自認とを以て萬事を成遂げんが爲なり。(は)痛悔後大にして且つ神聖なるハリストスの尊體

血を領くるに至る間の行爲ゑ關する問題なり。(ゑ)聖ゑして畏るへきハリストスの機密を領けし後の行爲と作業ゑ就ての問題等是なり。(サ)墜落及罪のことの敎なり。聖敎會は大齋前の最後の週間ゑ於て、人ゑ必要なる齋の本原、即ち其重もなる理由、及悲哀を顯はしつゝ、元祖の墜落を記憶せしむ。實ゑ元祖の墜落と罪ゑ由て吾人の天性の腐敗したる事を解明するに最も適當なる時は、一般ゑ罪を悔いて之を傷むの時なれば也。

(タ)救贖ゑ就ての敎なり。イエスハリストスの地上生活の最後の日の事、及受難週間の大なる日ゑ於ては、殊ゑ贖罪主の生活、其福音、其苦難、及其十字架の死を述べざるべからず。

(ナ)聖像を尊敬するとゑ就ての敎なり。而して正敎の週間に於ては、敎會權のと。中央十字架の週間ゑ於ては、十字架の事、及其他齋の諸日ゑ於て

は、教會の個々の奉事の指示に循ひ多くの種々なる問題ゝ就きて述べざるべからず。

(ハ)創世記、イヨウ記、イサイヤの書、及其他の書を解明するとなり。但し聖金口、大ワシリイ、及其他教會諸師父の例に倣いんゝとを要す。

(乙)教會及信者の事情に適應せる說教問題

教會及信者の事情とは、即ち(い)最も壯嚴なる諸日及(ろ)聖堂、善業、教場等を成聖すること也。

第三十七章　最も壯嚴なる日の說教問題

最も壯嚴なる諸日は、祭らるゝことの相互ゝ離るべからざる關係を表はす所の祝典、即ち教會、帝王、及生國の合祭日なり。此幸福なる關係中ゝは、公私の眞正なる安全の本原を含有するが故ゝ、教會と國民との祭日に於ては、聖使徒が述べたる『敬虔ハ凡ノ事ニ於テ益アリ、而シテ今世及

來世ノ應許を得』(テモフエイ前四ノ八)といふ短文深意の言ゝ含蓄せるハリストス教の課程を聽衆ゝ授くるゝ最も便利なる機會を有す。是よりして正教ハリスティアニン」の一般の本分を述ぶるとは、祝日說教の首もなる問題を成立す、而して第一に最上權に對する本分を述べざるべからず、說教者は此場合に於て、敬虔の感情を以て上天よりの傳膏、及教會權の冒すべからざると、帝王に對しては、啻に憤怒を懷かざるのみならず、乃ち至誠を以てし、唯ゝ奴僕の畏懼心よりせず、乃ち子たるの愛を以て之ゝ服從すべきと。帝王の爲に祈願感謝すべきと等を述べさるべからず。第二に全社會に對する本分を述べざるべからず、愛ゝは一般に「ハリスティアニン」の愛と分離すべからざる生國に對する愛の事、即ち吾人が敬虔なる祖先より傳來せし生國の善事に熱心なるべきと、社會の慈惠者、及仇敵ゝ對し、生國人及外國人に對し、同信者及異信者に對する關係ゝ就

て述べざるべからず。第三は社會の種々なる職業に關する本分を述べざるべからず、即ち各自の職業の貴重すべきことを勸告せざるべからざ、蓋し此に由て各自の職業に結合したる本分、及凡ての他の職業に對する本分を熟心に成遂ぐれば、なり。また總ての階級の間に相互の尊重あるよりして、信者及人民一般の連合、同意、順從を生ト、且つ人民一般の勢力及安全を生ぜれはなり。凡そ此等の教は、『ハリスティアニン』及國人ノ互ニ一致シテ分離スベカラザル「、地上ノ國ノ幸福ナルハ、唯其國ノハリストス國タルニ堪フルノ時ナリ、唯地上ニ於ケル萬事ノ平安ニシテ上進スル時ナリ』（大主教プラトンのディミートリイの即位日に於ける說教）との主意を解明するてとたらざるべからず。

第三十八章　聖堂及其他のものを成聖する時の說教問題

聖堂の成聖式は、吾人はハリストス教會の聖堂の貴重なると、公奉神禮

及祈願の緊要なる事を思はしむるのみならず、聖堂の儀式の事、神の外部の聖堂の、吾人が內部の聖堂と適合すること、「ハリスティアニン」と教會と外部交通の必要なると、其功果あると、神の聖堂を修飾するに熱心なるべきと、主の聖堂に献物の價値あると、並に總體外部敬虔の勢力あると、其貴重なると等を講說するは至極適當にして且つ有益なりとす。時としては聖堂建築と伴はるゝ種々の事情も亦自然此場合に適當なる他の說教問題を指示することあり。慈善の爲に建築せる家屋を成聖する時、或い特別なる場合に於て執行せらるゝ聖堂の奉事の時は「ハリスティアニン」の愛の精神、及「ハリスティアニン」にあらざる者の愛より異なると、惣体困難者に務むるの價値あると、主自ら仁慈の行を以て得られし功德のと、自己をハリストス教の慈惠の業事に献ぜる人々の本分、及其非常に困難なる勤を成遂ぐるの規約に就て講說すべし。

教會の牧者は、新築の學校を成聖し、及祝福するゝ招かれたる時は、眞正「ハリスティアニン」の教育の特点と、及其卓越したる性質、智識開發の德義開發ゝ於ける關係、智德開發の「ハリスティアニン」の敬虔ゝ於ける關係等に就きて述べざるべからゞ、殊に凡ての眞正なる開化の惟一の源因者、即ちハリストゝい凡ての信者を照らし、且つ聖ゝするの光なる事を述ぶるを以て、最も當然なりとす。

(丙)種々の場合に應ずる說教問題

第三十九章　社會偶然の事件に於ける說教問題

百般なる社會偶然の事件中ゝい、喜ぶべきことあり、或い哀むべきことあり、其喜ぶべきことゝは、氣候の順和、果穀の豊饒、帝王の仁政等是なり、其哀むべきことゝは、饑饉、疫病、仇敵の侵擊等是なり。

喜ぶへき場合ゝ於ては、人民をして神に對して感謝の心を奮起せしめ

ざるべからゞ、蓋し神の凡ての賜は善美なれば也、又神の仁慈を惡用するを預戒し、質素、儉約、温柔ゝ導かざるべからず、蓋し此等のことは人民の爲め斯世に於ける安然の修飾警護なれば也、又地上幸福の無常なることを憶はしめざるべからず、何となれば此の如きことは飽足の感情を節し、及事情の惡事ゝ變遷するゝ際して、可愧小膽と喪心より預戒する勢力あれば也なり。

哀むべき場合に於ては、說教者は先づ第一ゝ無言者たるべからず、凡そ喜は口を開き、憂は唇を閉づるものなれども、神の奉事者は人の言語が慰藉を辞する時と雖ども、尙福音の効力と、其確實とを述べざるべからゞ。されば主は自ら神言を宣傳する牧者ゝ告げて曰へり『慰メヨ汝等、我民ヲ慰メヨ、懇々イエルサリムニ語レ』(イサイヤ四十ノ一)と。實に福音は貧者の嘉音、弱者の鼓舞、囚虜者ゝ解放、瞽者ゝ復明の宣傳なり(ルカ四ノ十八、十九)。若し牧者

よして人民の迅雷風烈の不幸なる場合よ遭遇せると見て其首を低るゝ時は、自已よ眞正牧者たるの精神なきことを示し、且つ其說敎は他の場合よ於て信用を受けざるよ至らん。

憂愁ある者、又輕蔑されたる者を慰めんには常に神の被選者よ有りし多回の試誘、且つ今後も亦有らんとする試誘は、聖神の恩寵力を以て固められたる人の力を超過せざりしと、且つ超過せざることを示さゞるべからゞ。神が屢々其忠義の僕よ悲哀、艱難を許容し、或は之を送り遣はすとあるも、常に試誘の中に、偕に之を避くべきの方法を備ふる所の神の照管法を說明し、『爾ノ中兇殺、竊盜、惡ヲ行ヒ、事ヲ滋クシテ、苦ヲ受クル者アル、勿レ、然レ𪜈(ハリスティアニン)タルノ故ヲ以テ苦ヲ受クルハ、即チ羞ヲ啓ク勿レ、乃チ此ニ緣テ榮ヲ神ニ歸セヨ』(ペートル前書四ノ十五、十六)との使徒の規則を記憶せしめざるべからゞ。終よ「ハリスティアニン」に艱難の中よ靈

を處置することを勸告奮勵せざるべからゞ、蓋し聖書に曰く『不一ノ試誘ノ難ニ陷ル悉ク當ニ主ノ爲ニ喜トナスベシ、爾ガ信ヲ試ムルノ試、忍耐ヲ生ズルヲ致スヲ知ルニ因テナリ、唯宜シク忍耐ヲ生ジテ全ク行ハシメ、爾全ウシテ且ツ備ハリ、欠缺スル所ナキヲ致サン』(イヤコフノ二至四)と。加之、諸人を反省、痛悔、及自治の決然たる契約、殊よ哀憐、仁慈の行に招致せざるべからゞ。嘗て聖大ワシリィは斯の如き一の場合、即ちケサリヤよ延及せし恐るべき饑饉の際よ當て、被牧者を自治及ハリストス敎の感情と愛德とよ招致しつゝ、其能辯と以て殘忍なる富者の頑心を柔らげ、彼等をして貧者の爲よ其穀倉を開かしめたり(其著書第八册大旱饑饉の時の說敎)。聖金口はアンティオヒヤ人よ對する說敎中よ、即ち皇帝の像を推倒したる場合よ於て、彼等を神と帝王との仁慈に於けるの希望を以て慰め、且つ共に眞實の悔改を勸說したり、而して神い其牧者の說敎を希望ある進步

ゑ祝福したりき。メディオランの聖アムブローシイはイタリヤの州郡を震動せし内乱の困難なる場合ゑ際して、聖書の種々の個所を講明し、而して其中に於て自ら恩寵の慰藉を發見せしが如く、他人にも亦恩寵の慰藉を授けたり。其他説教者ゐ斯の如き場合ゑ於て、教會の種々の事蹟ゑ於て、人民の艱難の場合に於て其述ぶべきことゝ、其述ぶべき方法を發見することを得。

或場合ゑ依て風評の由來する處を知らざれども、多少社會の安寧を害すること、或ゐ無根の危懼、若くゐ無根の待望、或ゐ剩へ人民の理會せざるゑ由り、或は誤解に由て、政治上の處置ゑ怨言を播布することあり。此れ亦人民の不幸ゑ關するものなれば、斯の如き現象の警護者たる牧民的説教者は、其聖職の範圍内ゑ於て、特別の誠心と智慧とを以て作動しつゝ、是等の不善なる結果を預戒せざるべからぜ。又説教者は父たるの意

趣と、友たるの意見とを以て迷謬ゑ反對なる眞理と證することを得、否宜しく之を證せざるべからず、但し其迷謬を詳明するは不可なり、何となれば人民の惡性を轉じて善ゑ向はしむるには、全力を用うべきも、唯些かたりとも己が本分の範圍を越ゆることなく、心靈上の勸告と以て作動せんことを要すれば也。

第四十章　個々の場合ゑ於ける説教問題

社會に於ける個々の場合、例へば、洗禮、婚配、埋葬、叙任式(社會の)、或企圖、勞働の始、終等ゐ亦多少一定したる説教の材料を説教者ゑ指示す。

(い)洗禮、婚配等の場合ゑ於てゐ、牧者は之を祝福すると共ゑ、或人々に對しては、彼等の位置、契約、本分ゑ關するヘリストス教の緊要なる諸点を簡短ゑ述べて滿足すると最も適當なりとす。代父母ゑ對しては、洗禮の洗盤より受くる所の代子ゑ關する責任を説明し、又其代子の心靈的の

両親たる職分の緊要なること、自己の代子に代りて神前に大且聖なる契約を與ふる所の保證人たる彼等の責任を説明せざるべからず。婚配者に對しては、教誨と勸告とを以て家族の生活に立しめざるべからず、即ちハリストスと教會との關係に於て其合体の機密を記憶せしめ、教會の祝福を高價なる賜として保たしめ、萬事の關係に於て相互の柔和を守らしめ、侮辱、不信用、不忍耐を以て家族の平和を破る所の恐るべき仇敵として畏れしめ、野鄙なる肉体の娯樂に於ける不貞操、偏愛等を嫌忌せしめ、總て自己の家内に神の教會を造くることを勉むべきを述べざるべからず。

(ろ)社會に功勞あり、且つ「ハリスティアニン」たるの資格を以て著名なる人を埋葬する時は、逝者に對して幾何か敬愛を起すに足る所の其履歴を述べて、聽衆をして「ハリスティアニン」の眞に尊むべく、且つ價値ある思想

と、感情とに向けしむることを得。然れども或稱譽の爲め、殊更に虛禮をなし、又い或人々に喜ばれんと欲するの趣意より讃稱するい、苟も説教者のなすべからざる事なり、況んや誹謗の精神を以て逝者の脆弱なる有樣を述ぶるが如きは、更に惡しく且つ甚た不利益なるに於てをや。斯の如き事を述べんよりは、寧ろ默するを可とす。常人若くは説教者にして其平素の生活を知らざる人の埋葬と行ふの際には、其機會が發端を與ふる一般の眞理を解明せざるべからず、例へば、死の原因、死の畏るべきこと、死に准備すべきこと、又吾人に不死、及永生の恩寵の分與あること、「ハリスティアニン」の死者に對する本分、及ひ彼等の爲に祈禱すること、死後の生活、死者に對して悲哀の度を過すべからざることなどの等是なり。

(は)叙任式(社會の)の時は、教會及生國の命に依て被撰者を公平に向はしめざるべからず。又彼等に社會本分の價値あること、並に誓詞の効力及責

任を說明しつゝ、自已の本分を熟心ゝ勉むべきことを勸告すべし。

(に)或緊要なる企圖及勞働の始りには、被牧者は己の牧者ゝ向て、其業務ゝ神の祝福を願ふこと屢々なり。斯の如きことゝい特ゝ農民が田畑の勞働を始むる時ゝ多しとす。若し何處ゝまれ此の如き事あらざりせば、牧者は此の敬虔なる風習を起すことを努めざるべからぜ。若し幸ゝ之ありとする時ゝ、彌々之を固め、且つ短簡適切なる敎誨を述ぶるゝ止まるべし。斯の如き敎誨の一般の問題は、即ち凡ての善業に敎會の祝福の傚力あること。勞働を愛すべきこと。種々の企謀をなさんゝは、廉潔なる趣意、潔白なる方法の必要なること。何處ゝ於ても何事に就ても、試誘の預防、弱者の聲固、憂悶者の奮勵、諸進步の憑證たる吾人の主イイスス、ハリストスの名と呼祈すること等是なり。又個々の問題は、即ち萬有の聖堂を神の聖堂ゝ向はしむること。人ゝ緊要なる睿智の寶藏の地面ゝ散布すること。農夫の勞

動の生活は、神の睿智、及仁慈の經理ゝ依て、屢々或人々ゝのみ得られ能ふ所の、潔白なる滿足を以て合せらるゝこと。又平安にして自已の業務、勞働を終りたる時は、啻ゝ言語を以て神ゝ感謝すべきのみならず、乃ち殊ゝ「ハリヌティアニン」の行を守り、神の誡命ゝ循ひ、且神の恩寵の賜を利用して以て神ゝ感謝を表すべきと等是なり。

(は)前陳の外尙種々の敎誨ゝ適當なる數多の機會あり。此等の機會は奉神禮書中ゝ記載せり。自已の業務ゝ熱心なる牧者ゝ、一個の機會を公なる機會、即ち一般の利益に向けしむることを得べく、否向けざるべからず。斯の如きおとゝい往々家族の慈父等ゝ見る所なり、即ち彼は其一子に遭遇する所の事情を擧げて、諸子の課程ゝ供するが如く、家族の父たる牧者も亦然かせざるべからぜ。然れども斯の如き機會ゝ於ける敎誨の問題及其性質は、奉神禮書より取らざるべからぜ、然るゝ說敎者の多分が

之を知らざるは誠に悲むべきなり。

第四十一章　説教者自らの位置及狀態に應ずる説教問題

牧民的説教者自らに關する諸種の事情中、爰に説教問題として指示すべきものゝ、其被牧者に就く時の辞、其年齢、教權、及心靈上の經驗に應ずたる辞、並に被牧者の彼に對して或不穩なる關係を有する機會等是也。

(い)被牧者に就くことは、説教者たる牧者の生活中最も緊要なる一機會なり。若し説教者は其高尚なる職分に對して正當の自認なくして之を受くるに於ては、此時其靈中に種々の思想起り、其心情に幾多の感情を生ぜざるべからず。是故に牧者の最初の説教ゝ、多少全き承認を以て、衆人の前に其靈の狀態を顯はさゞるを得ず、自己の孱弱を自覺すると、神恩の佑助を得るの希望、被牧者に對する自己の本分、被牧者の牧者に對する本分に就ての思慮、己の全力全才を盡して教會に務むる眞實の契

約、牧者被牧者の共に必要なる恩寵及平和のこと、同心の祈禱に信者を招集すると等は、是れ大なる牧者等が、其最初の説教に於て被牧者の前に述べたる重もなる問題なり。勿論説教者の其管内教徒に就くに當て、各牧者の靈を占有すべきものは、他の思想感情に由らざるが故に、其問題は、牧者の最初の説教に亦全く適合して、自然此等を親しく牧者自らに亦其被牧者に應用することを得るもの也。

(ろ)縱令ひ悉くの説教者ゝ主神に代り其教會より述ぶると雖ども聽衆は説教者を、其説く所の教より識別し、且つ教に注意しつゝ、教ふる人の如何を念頭に介せざるは、常に能はざる所なり。故に説教者は其所説の已が年齢及位置に適するや否やに注意すべし。其年齢上より尊敬すべき高齢の牧者ゝ、年少の説教者よりも尚自由に許多の肉體上の惡癖に對して述ぶることを得。又之と同じく多年教會の勤務に從事して心靈上

の經驗あり、且つ其被牧者の尊敬を得たる者い、新參にして牧者に飲くべからざる經驗ゑ乏しく、且つ一般の尊敬及信用を得ざる牧者と比較せば、敢て逡巡の狀なくして、譴責、懲誡、勸告し得るなり。聖使徒パウェルは、被牧者を、信仰の言と善教を以て教ふる牧者の本分に就きテモフェイゑ教誨を授けて曰く『汝ノ年幼ヲ以テ人ノ爲ニ輕視セラルヽ勿レ、乃チ言ヲ以テ、行ヲ以テ、愛ヲ以テ、靈ヲ以テ、信ヲ以テ、潔ヲ以テ、信者ノ摸楷トナレ』(テモフェイ前書四ノ十二)と。斯く使徒は年少の牧者ゑ熱心其教師たるの本分を勉むべきを誡めつヽ、教師が被牧者より尊敬を得るの方法をも指示せるなり。此使徒の誡命は、新ゑ牧者說教者たるの業務を受けたる各人を亦服膺せざるべからず、おれ其經驗を得ると偕ゑ被牧者の信用尊敬と受け、然る後其被牧者ゑ植付くべきと、又い根絶すべき萬事に對し勇敢にして說教せんか爲なり。

(は)牧者が被牧者ゑ對して不快の感情を有し、若くい被牧者が牧者を仇敵視することあり。牧者い斯る場合ゑ於て聖使徒(特ニコリンフ後書及ガラティヤ書)及教會の諸師父の例ゑ循ひ、此事に就き聖堂の講座より述ぶることを得れども、牧者の當に爲すべき業務と、被牧者の幸福とゑ關することに限るべし。說教者い若し必要あらば衆人の前ゑ其意思と行爲との潔白なると、其力の及ばん限り一般の幸福の爲ゑ働かんと、及ひ其被牧者ゑ對する愛のことを證するを得。或疑念を了解し、己の荏弱ゑ對して「ハリスティアニン」の寬容を請ひ、其恩賜せられたるの權と、己の上ゑ置かれたる本分とに就て記憶することを得。仇敵を教訓し、及總て何事ゑ係いらず凡その敵意は被牧者ゑ害あるが如く、殊ゑ被牧者の牧者ゑ對する敵意の害あるを示しつヽ、「ハリスティアニン」の友愛の精神ゑ反對する諸の思念感情を除くが爲に、平和の首長たるイイスハリストスの名を以て被

牧者ハ教誨することを得。唯此等の諸問題を叙述するハは、説教者先づ大ハ戒心せんことを要す、而して最も重きおとい、全き眞實と被牧者の安寧とを思慮する牧者の趣意、及被牧者に平安同心を入るゝ希望の外、他ハ何等の趣意忖度のなかゝらむおとを要す。斯の如き性質ある時い、其説教は、全く聖堂の講座ハ適當なるものとなり、其目的と一致して、被牧者の爲に好結果を得るや疑なし。

以上陳述したる説教問題を選定するとよりして、牧者ハ(例ひ聖堂の講座より牧者の課程の爲ハ一般の圖式を計畫する能ハざるにもせよ)或一定の順序を見ることを得、之よりして生ずる所のことハ、(ア)説教者が唯己の爲に其説教問題を定むるに、極めて容易且つ便利なりと思ふことより偶然に、或ハ隨意に問題を選定するとき也。(イ)預め説教者の准備せる同一の説教を、或他の時に於て再演すること也。(ウ)他人の説教を當に説話すること、殊に注意熟考なくして此等を選定すること也。(エ)唯或時と場合とに因て、

説教の余り拔萃的なること也、凡そ此の如きことハ假令ひ其事惡しからぬ、又全く緘默をるに勝れりと雖ども、正當に心靈的牧者の説教の本分を成遂ぐることにハ非ざる也。

第二分類

說教の樣式を論ず

第四十二章　說教樣式の價値

聖堂說教ハ、其組織極めて平易なるべく、而して巧妙ゝ過ぎざるを最も可とす、されバ說教者は宜しく多數人の爲ゝ不斷の困難を悉く容易ならしめざるべからず。然れども此れ强ちゝ巧妙なる方法を用ひて說教を組織すべからずと云ふゝ非ざるのみならず、却て益々之を要するなり。此ゝ依て說教者は如何なる場合に於ても聖堂說教の樣式を等閑ゝ附せず、須らく凡百の假裝を避けつゝ、常に秩序的ゝ思想を配置するとゝ注意し、又說教の種々なる樣式を知らざるべからず、是れ說教の構造ゝ差支ふることなく、論理上の要求及思想解釋の原則を破らず、且つ聽衆

の理會力と時の事情とゝ應じて、諸種の說教法を使用せんが爲なり。

第四十三章　最も多く使用する說教樣式

牧者の說教は平易の課程より完備なる課程、所謂、能辨的說教ゝ至るまで諸の樣式ゝ顯ハすことを得れども、最も多く使用する說教の樣式は左の如し、曰く演說、曰く說教、曰く啓蒙說教、曰く簡約說教是なり。

或說教の構造法を講話と名く、教會文學に於ては、此名稱を以て、或ハ簡短なる說教を意義し、或ハ時として唯格段なる一個の主眼のみを有する完備なる說教を意義す。故に講話ハ總ての說教の格段なる樣式を組織するものにあらず。又牧者の普通說教より異なる講話ありたとへば貴顯に對する安問等是なり、然れども其異なる所ハ專ら其意義にありて、之を構造するの方法にあらず、且つ其特質を有するを以て、自然聖堂說教の範圍內ゝ屬せざる也。

演說

第四十四章　演說（スローウチ）の定義

演說ハ或一問題を、力めて完備正確ニ研究解明する聖堂說敎の一樣式なり。斯の如く演說は論議の性質を有するものにして、內部の合一、研究の完備、組織の嚴格なる順序等は、其異なりたる屬性及記号たり。されど演說は此等のことに就きて常ニ諸種の說敎樣式ニ一般なる會話的の性質を失ふべからざるなり。

第四十五章　經句より演說を組織するを論ず

通常演說の基本となすべきものハ、經句なり。經句とは、即ち聖書、信經、奉神禮書、或は諸師父の書より採る所の格言なり、蓋し敎會は此等の書を以て神に照されたる人々の書ニして、確實なる敎誨、及神言の正解を保持するものと認定すれバなり。

又演說は非經句よりも組織せらるゝことを得れども、首要の理由あるニ非ざれば濫りニ一己の私見より組織すべからず。經句を以て演說の基礎とするハ、最も經驗ある說敎者等の注目せる所ニして、古代より最も尊べる慣習なり。故ニ充分の經驗なく、名聲なき尋常の說敎者に於てハ、特ニ此慣例を維持せざるべからず。是れ一方よりハ、其聽衆をして第一に說敎者の彼等ニ敎ふる所のものハ、人の敎にあらずして神の言なることを知らしめ、且つ之ニ由て彼等に大なる注意と信用とを喚起せしめんが爲なり、他の一方よりは、說敎者自らも經句を以て其說敎を組織しつゝ、遠く神言より離れざるが爲なり。されば說敎者の經句ニ因らずして說敎することと得るは、但或場合ニ於てするのみ、例令ば、同一首要の問題を、多くの說敎ニ於て解明するときの如し。此の如き時に於ては、只父と子と聖神の名ニ依る、てふ一の日常不變の經句のみを以て足れ

りとす。

第四十六章　演說に於ける經句の價値

經句は演說の部分を組織するものに非ずして、其材料及基礎となるものなり。是故に經句を以て演說の冒頭に立つるは、即ち(ア)預め演說の重要なる問題を指示するとに(イ)偖に問題に就きて思想と判斷の爲に切要なる本原を定むる也。是に由て之を觀れば、源泉たる經句は、演說總体の意義に至近の關係を有せざるべからず、即ち演說を經句に起す所以は、恰も植物の種子より生ず、或は其種子の上に配置固定せらるゝが如く、又建築物の其基礎の上に排置堅立せらるゝが如し。而して經句は說敎の尋常の題號(エピグラフ)、若くは唯或問題に就て思考する發端となすべからず、即ち唯演說總体の意義のみならずして、其詳細なる意義を亦直接に本原の經句より流出して其上に固定せらるゝを以て最も可なりとす。是を以て如何なる場合と雖ども、演說の主要なる章句は全く經句に關せざるべからず。

第四十七章　經句を撰定するを論ず

演說の爲に經句を撰定するに關して、左の事項を識認するは亦利益なしとせず。

(第一)日々誦讀する聖書の經句を撰定するを以て最も可なりとす、蓋し人民は斯の如き經句を聽聞するに准備されたれば、なり。されども亦强て此規則にのみ拘泥すべからず、說敎者は聖書の他の個所及書を撰定し得るのみならず、常に指定の個所として人民の心靈上の要求、若くは時の事情に應じ、之を說くの必要なしと認定する時は、聖書外の他の問題を述ぶることを得るが故なり。

(第二)殊に左の如き經句と撰定せざるべからず、即ち(い)說敎の爲に唯首

要なる材料のみならず、個々の思想をも與へ得る所の意義よ富み且つ其意義の殊よ完備なる經句なり、蓋し縱ひ悉くの經句は經驗ある說敎者の爲よ良好なる材料たるも、又他よ數多の好材料と與ふる經句のあるに際して、何等の必要目的もなく、或嘉すべからざる目的と以て不便の問題を選定するい、自ら好で困難を擇ぶよ異ならず、(ろ)又甚だしく使用せられざるか(例へはエフェス三ノ十六、十七のハリストスの降誕說敎マトフェイ五ノ二十コリンフ前書六ノ十九、二十二埋葬にハコリンフ前書十五ノ五十五)よ想像せらるゝ經句なり。此等い皆聽衆をして大よ說敎に注意せしめ、又其心を奪ふものなれども、毫も高慢虛妄の趣意よりするよ非る也。唯此時說敎者は自已の力よ應ドて經句を選定し、決して自己の參量し得ざる經句を採取すべからず。

經句を選出するには、演說に於て解明すべき或眞理を充分に顯はす所の

範圍内に於てせざるべからず。經句の意義を定むるが爲に不必要なる文章の連絡を以て之を敷延するハ不可なりと雖ども、之が省略の多きに過るも亦可なりとせず。經句ハ時として婉曲に言ひ顯ハさゞるべからず、例之へは講座よ出で突然「無智ナル者ヨ、今夜將ニ爾ヨリ爾ノ靈ヲ索メントス云々」(ルカ十二ノ二十)を述ぶるか如きは固より不可なり、即ち此言を述ぶるに先ちて、神之に謂て曰くてふ序言を述べんを要する也。

第四十八章預め演說の順序を組織するの緊要なるを論ず

演說を組織するよい、預め自ら其問題を明白に了解せざるべからず、是れ說敎全体の意義をして直よ吾人の腦裡よ成形せしめんが爲なり。然るに選定せる問題を叙述するよ當り、充分其問題を勘考せゞして開說し、或い演說を組織するの材料を認了せゞして之が草稿と起筆する者あり、斯の如きい恰も萬事を偶然よ顯いすなり。講演の際い、或意味を他の意味よ連續せしめざるべからず、是れ演說の全進行い、偶然の接續若

くゝ連絡の如何ゝ關するが故なり。彼の著述者の起稿するや、其始めゝ當てゝ恰も物体を闇黑の中ゝ索むるが如き感をなして、問題を解釋することを勉めず、殆ど機械的ゝ發生する思想の後に動き、而して自ら斯の如き不自由なる運動ゝ、彼を何ごとに導くかを知らざる也。然れども敎會說敎に於てゝ、斯の如く問題を解釋することを得ず。說敎者は生活ゝ直接の應用を有する眞理ゝ就て述ぶるが故ゝ、其說敎ゝ鞏固なる承服の言たらざるべからず、されど其說敎をして承服の言たらしむるが爲ゝは、預め練習して之を說敎者の胸裡に熟せざるべからず、若し否らざれゞ問題を叙述し始むべからず、故ゝ前以て演說の圖式を組織し、然る後其意味を詳細ゝ叙述せんことを努むべし。

預め演說を組織することは、大抵習學者の好まざる所にして、約れ急迫に之を起草するを以て甚だ容易なる事と思惟すれども、是れ却て其智識上

の勞力に慣れざるを顯すもの也。演說の眞好なる圖式を組織するは、實ゝ容易ならるものゝ非ず、何となれば圖式中にある凡百の意味ゝして、苟も之が組織及潤色なき時は、其意味自から素質を顯ハすが故に、果して其勢力あるか、將た薄弱なるか、抑演說構造の正なるか否やハ當初既に明白なれば、なり。而して完全に問題を叙述するに際して、演說の意味の乏しきと、或は其部分の間に必要なる接續の不足なるとハ、巧妙なる叙述法を以て庇蔽せられ、若くハ假裝せらるゝものなれども、聖堂に於て人々を敎ふるは、素より能辨を授くるにはあらず、乃ち神の眞理を授くるが爲なれば、說敎の業務に准備する者の大に誡むべきとなり。されば說敎者は將來他人を敎ゝんが爲に、宜しく先づ深奥該博に眞理を智慧心情中に會得すべし。

第四十九章　演說を組織するに緊要なる性質

演說を組織するに緊要なるものゝ、其完備と一致なり。

組織の完備なるゝ、演說の精密をいふゝあらずして、演說中ゝ其必要な

る凡ての事項を包含する所の圖式を有するよあり。甚だ精密なる圖式は却て不完全よして、完備なる圖式ハ甚だ該博ならざることあり。問題の個々の点よ關する精密ハ圖式中よ於て許すべからずと雖ども、問題の緊要なる性質、即ち成分ハ、皆演説の圖式中よ入れざるべからぢ。然らざれバ問題ハ實際的の問題とならぢ、例之へバ説教者若し吾人の祈禱の成功なきことを語りつゝ、其原因は唯吾人が願ふべきことを願ハず、若しくハ願ふべきことの爲よ願ハざるよありと云はゞ、説教者ハ問題の性格よ因て説話すべき所のことを悉く述べたりと云ふべからぢ、又之を以て全く問題に就き正しき解釋を傳へたりとなすべからぢ、何となれバ吾人は正しきことを願ひ、及善良なる目的を以て願ふと雖ども、吾人の祈禱の熱心眞實及愛情の足らざるが故よ、願ふ所と受けざることあり、約言すれバ其功驗なきは、此れ願ふべきが如く願はざるよ因るな

り。

圖式の一致ハ、其諸部分の密接するよ在り。演説に於ては或一の眞理を解明するとなるが故よ、凡て一の重要なる目的を以て貫かるゝ全備のものを組織せざるべからぢ。苟も演説よして一致なければ其目的を達すると能はざるべく、其問題よ聽衆の注意を集むると能はざるべし、且つ其聽衆よ希望する所の感覺を起さしむると克はざるなり。若し吾人ハ子女の両親よ從順なるべき本分に就きて述べつゝ、其両親よ從順なるべきはい天性の自然とろ神の誡命は社會生活の秩序の催促する所なりとの説明をなさば、其説明或は信ならん、然れども子女の從順をして偽善若くは奴隷の如き順從たらしめざるが爲にハ、両親たる者決して自己の權威を濫用すべからぢ、即ちア何事よまれ已れ一己の慾情を以て彼等よ要求せざるべくイ自己の正しき要求の程度を超過せざる

べきことを述べざるべからぞ。

或問題を詳解し、及其中の主成分を分解するには、力めて問題の明瞭精密に見ゆる所の視点を發見せざるべからぞ、而して其視点と發見するよい、先づ第一に演説の主意を成立する所の判斷よ入る凡ての定義を正しく撰定するよ在り。然れども斯の如き判斷は、聖書の經句なる時は、説教の意義を貫徹せしめんが爲よ、充分注意して其演説の意義及接續を觀察せざるべからぞ。説教者い斯の如き場合よ於てい、唯或添副の言辞を避けつゝ、此便益を貴重せざるべからぞ。吾人は爰に範例として『凡ソ我ニ從ハント欲スル者ハ、則チ當ニ己ニ克チ、其十字架ヲ負ヒ以テ我ニ從フベシ』(マルク八ノ三十四)といふ經句を取らん。彼よ從ふとは、嘗て吾人の救世主が地上に生活せし時、常に彼と偕よありし諸門徒の數中よ加入して、全く救世主の教導に從ふおとを云ひしなれども、此言い總てハリス

トス救世主に從ひ行くの意味たるや明けし、此れ即ち(ア)眞の神子人類の照管者たる救世主を信じ(イ)全く其聖旨よ從ふこと、即ち常よ信者たるの本分、殊よ吾人が信ずる所の主よ對する愛よ因り、福音の誡命と成遂ぐるを以て、吾人第一の務となす所の從順を有すべきことなり。而して凡そ此等のことい、眞正ハリスティアニンなる一の概念よ包含するを以て、救世主の要求は、彼よ從ふもの丶中、唯名のみハリスティアニンたるを欲せざる衆信徒よ關する也。此要求い何ことより成立するか。第一の要求い己よ克つとなり。即ちイイススハリストスの諸門徒い其天の教師よ從ふが爲よ(ア)自己の家を遺てか(イ)自己の從來の業務を棄てざるべからぞ、殊よ(ウ)救世主が傳へし所の眞理よ適せざる業務と、彼が誡めし所の生活の潔淨と偕よ容れざる願望と、彼が基せし國に不當なる諸子の希望を棄つるを最も肝要なりとす。斯の如くイイススハリストスの

從者たる全「ハリスティアニン」は、常ゝハリストスの誡命を守るゝ妨害する所の万事を棄て、彼と世に牽引し、及主ハリストスより遠ざかる行爲習慣を棄て、殊ゝ彼をしてハリストス國の會員たらしむる夫の重大なる召命に反對なる思念希望及計畫を遺てざるべからず。家と家人を棄て、及社會の業務を棄るが如きことゝ、使徒等特別の預定ゝ因て彼等ゝ要求せられしものなるが故ゝ、吾人ゝは彼等の如く要求せざる也。縱ひ或「ハリスティアニン」の爲ゝは、種々の事情に因りて、此要求も亦必要なるものとなれども、ハリストスの門徒の員中ゝあらんことを望む所の各人ハ、律法と聖福音の精神とゝ反對なる萬事を避けざるべからず。斯の如くなれば、此れ眞ゝ己れゝ克てる者なり又己れを捨る者なり。第二の要求は、即ち己の十字架を負ふゝあり。十字架とハ、身靈の苦難を云ふ、故ゝ此十字架を採るハ「ハリスティアニン」より要求する所の眞實と義と潔

との爲ゝ、如何なる痛苦艱難をも耐忍するの決心を示す也。己の十字架とは、即ち吾人が自己ゝ其原因を有し、或ハ兎ゝ角吾人自らの必要の爲ゝ受くる艱難なり。主は自ら十字架を負へり、されども其之を負へる者は、己が十字架にあらずして、吾人の十字架、吾人の爲に負ひし十字架なり、即ち彼の苦を受けしは全人類の罪の爲なりき、而して彼ハ其信從者に對ては、唯己の十字架を採るべきことのみを命せり、即ち自己ゝ淵源せる罪ゝ因て起れる己の疾病より癒さるゝが爲ゝ耐忍すべきを命せしなり。斯の如き十字架ハ既に捨己の中に含蓄し、次ゝ外部の誘因、例之へば、世俗の需用、人の不義等より生ずる種々の悲哀の中に含蓄す。「ハリスティアニン」ハ主が自ら示されし完備の模範たる善行ゝ臻達せんが爲には、「ハリストス」救世主に摸倣せざるべからざるが故ゝ、吾人は皆宜しく聖架を負ひし者の例に倣ひて己の十字架を負はざるべからず、然ら

さんば吾人はハリストスの門徒たるを得ざ、即ち彼の我に從ひ來れといふ招呼に應ずて、彼に從ふことを得ざるなり。斯の如く演說の悉くの意味は福音の經句より生出す。又眞正「ハリスティアニン」となるが爲に要するものは何ぞや、とい緊要なる疑問なり。之に對する答辨は經句を以て應ずることを得、而して之が解明は、直接に其經句に基く程演說の重要なる部分を組織するなり。

勿論悉くの經句い眞理を解明するが爲に斯の如く便益なるものに非ず、是を以て單り經句の言語及表言を撰擇するのみを以て限る能はざれども、之を撰擇するい、凡ての場合に於て問題を正當に說明解釋する第一の方法たり。凡そ眞理は、其含蓄する所の定義を以て確定せられざる間い、明晰一定のものとして吾人に顯はれざ、又眞理に對する論議い、正確一定の主眼を有せざしていい、爲に好結果を奏することを得ざるなり。

第五十章　演說を組織する部分に關する注意

演說は該博を要せざるが故に、其必要あるに非ざれば唯演說の入門、即ち序言を組織するのみに止らざして、直に問題に入るべし。然れども多少長き序言を述ぶることを得るい、唯或特別なる事情の之に意義を與ふる時、又は說敎者が其序言を以て聽衆の注意を說敎に惹くが爲に利用する時に在り。

演說に序言の必要なるは、猶文章に緒言の必要なるが如く然り、蓋し說話に一定の趣向なき時い、如何なる思想をも秩序的に構造すること能はざれば也。然れども或說敎者い演說の首をなる問題を秘するの風あり、而して或說敎學者（シュミドトの如き）の如きは、之を規則の中にさへ入るれども、是れ正當のことにあい非ざ、否演說の重要なる問題は必ず明瞭に述ぶるを以て最も可なりとす。實に序言い聽衆をして明かに其何を言ひ顯

はすかを知らしめ、且つ聽衆の了解し得らるべく明瞭たらざるべからざ。演說構造法の巧妙を顯わさんと欲する目的を以て、直接に其說敎の性格の何事に成立するかを述べざるわ、說敎者ゑ不當のことたり。然れども故らに演說の始めゑ於て其首要なる問題を秘して述べざることを得るは左の場合なり、即ち若し最初より說敎の爲に撰ばれし所の眞理を、直接に聽衆ゑ顯わしたらんゑは、彼等の說敎ゑ注意することを好まざるやを危ぶむの端緒わる時是なり。

若し演說の部分にして問題の主成分を預示せざるも、穿索ゑ於て甚だ明晰なるゑ方りては、問題の主成分を預示するの要なし。然れども演說の順序を明瞭ならしむるが爲に、之が預示を要するゑ際し、秘して述べざるは不可なり。研究の內部の價値は、預め問題を構造するの如何ゑ在り。精密ゑ演說の部分を解明するとに關してわ、必ず左の事項を識認せ

んとを要す（ア）甚だしく精密ゑ細分するおとを避けざるべからず、然らざれば叙述の冷淡に陷るを免れず、而して演說の範圍甚だ廣濶ならざる時を殊に然りとす、（イ）最も重要なる決定を要するものを除くの外、種々の駁擊を避けざるべからず（ウ）同一首要の思想ゑ一定の解釋を與へ、及悉く研究の一分類の他分類ゑ接續する樣、順序に叙述せざるべからず。

研究ゑ含蓄する所のことわ最も近く聽衆ゑ應用せんことを要す。應用わ（ア）諸種の眞理は何に導くや、（イ）或は敎に於て述べらるゝことを如何ゑ生活ゑ實試するか等の問題を一決するより生ぜざるべからず。應用は第一の場合に於てわ特別なる勸說の狀態を有し、第二の場合ゑ於ては特別なる敎誨の狀態を有す。時として自他のものわ同一の應用ゑ合せらるゝことあり。

(ア)特別なる勸說は、或問題に關しては不學妄信誤謬と鬪ひ、又或本分を果すに關していの不注意執拗輕卒と戰はざるべからぜ。例へい若し研究に於て、吾人が献祭して神に悅べるゝ一の眞實なる祭い、其聖旨を奉體するに在ること、及凡ての外部の敬虔なる行爲い、其內部の敬虔を表證するを以て神前に價値あることと充分に解釋すれば、應用に於ては、聽衆がパリスト教の外部の敬虔なる一記號を以て自己を慰めざる樣、克く此眞理を熟思するを欲せざる聽衆に勸說するを以て當然なりとす。

(イ)應用の特別なる敎誨い、問題を解釋したる後、演說中に述べらるゝ敎

を如何に利用すべきかを未だ述べざる時に於て必要なりとす。吾人は今演說に於て靈の熱心、即ち神に對し、及神の誡められたる事に對して、堅固且つ烈火の如き熱心を以て神に務むべき事の眞理を充分に解明したりと假定せば、此後自から左の疑問を生ぜべし、即ち此眞理を如何に實行すべきや、諸人い自己に斯の如き熱心なる精神を有することを望みしならんが、此熱心は凡ての者に與へられぜして、唯或者にのみ與へらるゝ時い如何すべきや等是なり。斯の如く爰に緊要なることは、說敎に於て述べらるゝ所のことを實行すべき方法を指示するに在り。

說敎

第五十一章　說敎（ペヤーダ）の定義

說敎とは、之を狹き義に云へば、經句の說明にして、之を廣き義に言へば、或問題を解釋し、及諸種の問題に就て平易なる對話の性質を有する總

ての教會説教なり。説教は内部の合一なるとあり、或い否らざることあり。或問題を研究するにい、之を徵証せんよりは寧ろ之が解釋を要す。材料を配置するよは、大抵一の問題と他の問題の後よ解明するに平易なる順序を以て限りつゝ、嚴格なる組織、調和、周到を要せず、是れ卽ち説教樣式の特点なり。

第五十二章　説教（ペヒーダ）の使用を論ず

説教は古來最も多く使用せる聖堂説教の樣式なり。演説（スローウチ）い説教（ペヒーダ）の如く、一般よ用ふるおとを得ず、此れ演説は第一之と組織するに特別の困難及巧妙を要するに因り、第二多少教育ある聽衆よ向て述ぶるに因る。是を以て演説は概ね祭典祝日に最も適當なれども、之よ反して説教は其組織廣く、且つ尋常の對話に近きのみならず、説教者い之を准備するに特別の困難なく、教育なき聽衆も亦容易に之を了解するを得るを以て、

常に牧民的説教の爲よ便利にして且つ適當の樣式たり。加之、説教い演説の如く定理上の句調を有せざるを以て、演説よりは常に聞き易し。是故よ教會の聖師父等は大抵説教の樣式を用ひて傳道せり、されゞ今日に遺存したる彼等の説教集よ在る所の聖書及諸種の問題の演説は、之を説教と比較して甚だ多からざるを見るなり。

第五十三章　説教の材料よ就ての注意

前章既よ陳述したるが如く、説教の材料となるべきものは、概して、或經句、特よ新舊約書の經句なり。又説教の爲よ聖書より區分せられたる經句、例之へゞ日々誦讀する所の數句、或は全章、且つ全書を撰定することを得。區分したる經句を説教の爲よ考究するよは、解釋の爲に適當の材料を含蓄する大なる經句を最も便利なりとす。其言簡よして意義よ富める經句は、註釋的演説の爲めよ最好の基本となれども、斯の如き場合に

於て說敎及演說の差別を立つるは困難ゝして、且つ實に之を區別する特別の必要なき階級ゝまで相類似するゝ至る。聖堂の講座より說敎するが爲ゝ聖書中の一章若くハ一書を撰ぶことゝ就ては、總ての說敎問題を撰定する分類ゝ於て既に述べたるが如し。

聖書の經句の外說敎の材料となるものハ、敎會の經句なり。例へバ信經、奉神禮の時及敬虔なる「ハリスティアニン」の家族に於て最も多く用ふる所の祈禱文、敎會の種々の唱歌、特ゝ短き文言中ゝハリストス敎の重大なる眞理を有つ所のもの、即ちイイススハリストスの神人両性の結合、及至潔なる生神童貞女マリヤゝ關する正敎の敎を含有する所の「ドクマーティカ」、所謂生神女讃歌、敎會祭日の性格を顯ハす所の讃詞、小讃詞（トロパリ コンダク）「イーコス」（副詞）及其他之ゝ類するもの等是なり。

說敎の問題ハ經句ゝあらざるものを用ふることを得れども、其材料は

凡ての場合に於て或經句の性質を有せざるべからず。例之へバ聖堂說敎の爲ゝ唯發端と與ふるのみならず、乃ち其問題をも與ふる所の事件、敎會の儀式、万有の現象、諸種の場合等に就きて述ぶる時は、皆經句外の問題なり。故に說敎者は經句ゝ類似せる此等の問題中ゝ於て自已の聽衆を敎化するが爲ゝ眞理の積極的及消極的の表言を發見し得べし。

第五十四章　說敎を組織する部分ハ關する注意

說敎の緊要なる部分ハ左の如し。

（ア）解釋（イ）德義上の應用是なり。

解釋若くハ叙述に關して應ゝ認識すべきことハ左の如し。

（ア）經句を說明せんゝは、一の不明瞭なきまでゝ解釋せざるべからず、總て註解に於てハ、解釋ゝ過ぎ、又ハ簡畧に失せざらんとゝ注意せざるべからず。解釋に過ぐるゝは、說明を須たずして充分明晰なることをも解釋

し、或ハ凡ての言語を詳細ニ分解し、及簡約なるべき註釋ニ長時と費し、而して長密を要する應用ニは、却て少時間を遺す時ニあり、之ニ反して說明の簡略に失するハ說敎者が聽衆を以て已が述ぶる所の事實及定義を詳悉せる者と假定して述ぶる時ニ在り。而して經句の首要なる意義及之が相互の關係を明瞭ニ顯はすは如何なる場合ニ於てを亦緊要なりとす。

(カ)解釋は或少數の場合を除くの外ハ、精密なる穿鑿、即ち文典上の穿鑿、及批評的註釋の吟味、并ニ古物學の詮義等をなすが如き必要なく、又嘗て聖書の或個所の意味ニ關して行はれし爭論証據及反駁をなすの必要なきなり。說明さるゝ個所を直接に語り、時としては比喩的の表言を以て自己の表言ニ代へ、聖書の意味を至近なる比較、範例、類似を以て聽衆ニ說明し、或は已が說明を確定するニ敎會の師父、又ハ著明なる書の

個所を引用せバ即ち足れり。若し罕類なる場合ニ於て、或一方の事情、例へバ岐敎の誤謬說等ニ惑ハさるゝ者ある時は、大ニ注意戒心して爭論の問題を詳解すべし。是れ人民一般ニ或經句の眞義を說明し、而して之を以て不經驗者の誤解を預防せんが爲なり。

總て說敎ニ於ける已知の材料を擴張して說明叙述するは不可なり、縱ひ此時學問より諸の善良且裨益ある報告を利用し得るニもせよ、學術的研究の性質を有すべからず。而して之が最秀の範例となるべきものは、古代敎會の師父の著書中ニ存す。

德義的の應用ニ關しては左のことを識認せざるべからず。

(イ)應用は解釋若くは叙述ニ比較して大約其範圍の廣からんことを要す、殊ニ經句の上ニ基原せざる說敎ニ於て然りとす、されど其應用も亦甚だしく延長に失すべからず。

(ロ)説教は演説と比較する時ハ、諸種の問題を叙述するに自由を有すれども、其應用ハ種々なる多くの性質を有せざる樣注意せざるべからず、而して縱ひ其材料及內部の接續の不同なるも、到底其精神は同一に貫徹せざるべからず。例之バ、若し説教者がルカの二章一節より十四節迄の經句を解釋して、救世主の籍身の奧密なると、其降誕の事件中に啓示さるゝ神の睿智のことを述べつゝ、突然七節の場合を取て、母の子女に於けるの配慮に説き移るが如きハ不可なり。

(ハ)解釋せられ若くは叙述せらるゝ材料より德義上の眞理を抽出することハ、一方よりは、正確なるべく、他の一方よりハ、端嚴にして教化的たらざるべからず、是れ其抽出せる所の眞理をして問題の本質より流出し、而して最も適切にして聽衆に關與せんが爲なり。されども應用ハ時として順序に聖書を解釋するに方り、特別の材料とも其中に含蓄する

ことを得、是れ往々聖金口のマトフェイ福音及其他の聖書の説教中に見る所なり。

(二)解釋と應用間の轉換ハ各樣たらざるべからず、此れ吾人が左の言、即ち、之よりして吾人の何を學ぶべきやハ、以上の所論に因て明なり等の詞を斷へず復習せざるが爲なり。

説教の綿密なる排造法の一例

七餅及若干の魚を以て四千人を飽かしめたる事に就きて(マルク八一至九)

(序言の後『當時衆極メテ盛ニシテ食フ所ナシ云々』(一節)曾て吾人の主救者ハティルとシドンの境より曠野を經てダルマヌフ(後に地圖を略述し及此事件と他事件との關係を示すも可なり)に至りし時、無數の人民ハ遐邇より此曠野に來りて主の周圍に集まれり、實に其衆極めて盛なりき、聽衆諸君よ、此人民は何の爲に

斯く救世主の左右に集りしや、何の爲に人民ハ住み慣れし其邑と町とを遺し、家をも棄て、飲食のことをも慮らずして曠野に來れるや。即ち此人々の中、或は主の奇蹟を見んことを望み、或は主の癒しを受けんことを欲したり、而れども公衆は一般ゝ其敎を聽かんことを渴望したりし也。此人民が救贖のことゝ非常の熱心ありしことは、人世の萬事に注意せずして悉く之を棄て、只一の幸福と永生の談話とゝ注意し、神言を謹聽せるを以て知るべし。斯の如き聽衆は吾人の中果して幾何かある。多くの者は何事よりも神の誡命を貴重し、聖預言者ダウィドの如く、晝夜之を學バんことを望みしや否や云々。

『食フ所ナシ、イイスス其門徒ヲ呼テ、之ニ謂テ曰ク云々』

主ハ何の爲ゝ門徒を呼びしや。門徒なくんバ何の爲すべきことを知らざるが爲なりしか。門徒等ハ果して現在の困難なる場合ゝ際し、之ゝ神

益ある勸言を與ふることを得たりや。爰ゝ吾人は救世主の其家人たる門徒ゝ對するの睿智を見ることを得。主が門徒ゝ向て如何ゝ行ふべきかを商議せしは、自ら其行ふべきことを知らざるが爲ゝあらず、乃ち其行ふ所の事を門徒等ゝ知らしめ、之が敎訓となさんが爲なり云々。

家族の父たる者ゝ、余は爾等ゝ、救世主の例を課程ゝ與へて、如何ゝ其家族ゝ對すべきかを知らしめん。自己の或處置、殊ゝ重要なる處置ゝ就て家族を遠ざくる勿れ、又「ハリスティアニン」の智慧の事業ゝ於て彼等と熟議せよ。若し爾等自らも商議せずして爲すべき時ゝ如何ゝ行ふべきかを知らバ何をか要せんや。爾等自らゝ敎誨と解明とを受くるが爲ゝ非ずとも、（縱ひ此の如きことも亦甚だあり得れども）乃ち或場合ゝ於て怜悧なる處置ゝ他人を敎誨せんが爲ゝ、家政的の說話及勸告を爲せ。

『我斯衆ヲ憫ム云々』（節二）神恩の人々ゝ必需たるは如何ゝ洪大なるや、且

つ主が自ら『我斯衆ヲ憫ム』と語られたる人々は如何よ幸福なるや。主自ら困難の時よ當り、仁慈の眼目を放ちて斯の如き幸福の宣言を垂れ玉ふ其困難如何ぞや。神よ對するの忍耐と虛心と愛とを以て自己よ神の仁慈の眼目を牽引しつゝ、吾人の困難と轉ト て慰籍よ向はしむるは實よ吾人の行よ關するなり。

『我斯衆ヲ憫ム、其我ト偕ニスル三日ニシテ、今食フ所ナキヲ以テナリ』。此民は全く主の哀憐よ當れり。彼等は唯主の福音を聞かんが爲め、一切を忘れて三晝三夜の間主の左右を離れざりしを以て、仁慈の主は如何ぞ之を恩待せざらんや。然るよ吾人の中には稍長き奉神禮を嫌厭し、憂悶鬱閉して啻よ三日のみならず、一日中三時間、若くは一時間の短時間たりとも警醒することを欲せざる人あり。斯の如くして吾人の救世主は尙は豈に吾人の需用を滿足せしめて以て吾人を恩待せんや。

『我若シ之ヲ饑餓シテ其家ニ歸ラシメバ、則チ途間必ズ困憊セン、蓋シ其中遠方ヨリ來ル者アレバ也』(三節) 主の衆民よ於ける此の配慮は、自己の近者の困難なるよ當て、或者の最を愧つべき罪なる冷淡、及眼前に困難者を忍ぶ者よ對して何事をか述ぶるの機會を與ふる也。自己の懶惰若くは浪費の故を以て、其家人を欠乏貧苦よ陷らしめ、而して毫も之を意よ介するおとなく、唯自已の爲よ生活する家族の父あり。爰よ斯の如き人々よ對して使徒の言を記憶せん、曰く『人若シ己ニ屬スル者(家人)ヲ顧ザレバ、是レ信ノ理ヲ棄ツルナリ、信ゼザル者ニ較ブレハ惡シ』(テモフェイ前書五ノ八)と。

其門徒之ニ對テ曰ク、此野處ニ在リ、何ニ由テ餅ノ以テ之ヲ飽カシムルヲ得ンヤ』(四節) 嗚呼如何せバ可ならんとは、おれ先見なき人が因難なる事情の場合よ方りて、屢々不滿足なる樣子と、驚くべき不忍耐とを以て

述ぶる普通の答辞なり。主の全能仁慈を實視したるイエスハリストスの門徒の口よ此の如き答辞の顯はるゝは、實よ奇怪なりと云ふべし、而して彼等の斯の答辞をなしゝは、尚未だ其不完全なりしよ由る也。吾人は果して門徒と同ト からざるか。吾人は往々吾人よ對する神の仁慈を明視すれども、尚恰も主を信せざる者の如く、主よ希望を有すると なく、屢々主の仁慈と恩寵の大業とを忘るゝよ非ざや。人類の薄弱なると斯の如し、然れども此薄弱は常よ吾人よ宥恕すべきよあらざる也云々。

『イエスス之ニ問フテ曰ク、爾餅アル幾何ゾ、彼等曰ク、七ツ』(五節) 主が此問を設けたるゝ、直よ全成し得る神の全能仁慈の事業をして、聖使徒の爲のみならず、乃ち全信者の爲よ最も明晰ならしめ、且つ教誨の目的を以てしたるや疑無し。

『イエスス衆ニ命シテ地ニ坐セシメ、七餅ヲ取リ、祝謝シテ擘キ、其門徒ニ與ヘテ之ヲ陳セシム遂ニ衆ノ前ニ陳ス』(六節) 今荒野は如何よ美麗よして感動すべき演劇を現出したるや。今や食物よ富まざれども、神恩の奇蹟よ富める宴會は開濶なる天の下よ設けらる。此れ主の自ら之を設立して善良敬虔なる衆民を饗應する也。彼は祝謝し、而して自ら餅を擘けり云々。

實よ幸福は主神よ於けるの希望なり、蓋し人主と偕よせバ何處よ在るも亦缺乏するとなく、又滅亡するとなからん、曠野よ在り、或は大海よ在り、而して飲食衣服の携ふるなきも、唯若し主爾等と偕よせバ、即ち爾等は凍餒饑餓を免れ、爾の安全と生命とを害するとなけん。聖使徒証せるが如く、信者は『邑中ニ在ルノ危キ、曠野ニ在ルノ危キ、航海ノ危キ、僞兄弟中ノ危キニ遭フ』(コリンフ後書十一ノ二十六以下)も、主イエスハリストスの力を以て

万事ゑ打勝つことを得るなり。

『些須ノ小魚アリ、亦祝謝シテ之ヲ陳ゼシム』(七節) 主は衆民ゑ其体力を固むるが爲ゑ必要なる食物のみならず、乃ち最も彼等の口腹を悦ばしむるの食物をも賜へり。

何人も食すべき時ゑ當て必要なる飲食物を用ふるは勿論、美味の食物をも用ふることを禁ぜず、唯之を用ふるゑ於て宜しく節度と守らざるべからず。

吾人は曠野の食卓の禮義正しく華美なりしとをも不注意ゑ看過すべからず。衆民は主の言ゑ循ひて席坐し、而して主自ら榮を神ゑ歸し、且つ祝福して餅を擘けり、されゞ吾人の食卓ゑ於ても亦宜しく禮讓と敬虔とを堅く守るべき也。聖書ゑ曰く『爾等或ハ食、或ハ飲、何ノ行ヲ論ゼズ悉ク宜シク神ノ榮ノ爲ニシテ之ヲ行フベシ』(コリンフ前書十ノ卅一)と。

『是ニ於テ皆食フテ飽キ、其餘屑ヲ七籃ニ拾フ、食スル者約ソ四千人』(八節九節)

神の祝福の勢力あると果して如何ぞや云々。

『乃チ衆ヲ散ゼリ』主ハ餅と救贖の言とを以て衆と養ひて各の家ゑ歸らしめたり。聽衆諸君よ、爾等は此處より自宅ゑ歸りて、予が言の乏しきが爲ゑ、神聖なる教を以て爾等を養はざりしとあるも之を議すること勿れ。

余ハ爾等ゑ願ふ、今爾等の聞きし所のことを忘るゝなからんとを、且つ神言ゑ對して如何なる熱心を有すべきか、家庭ゑあり、神殿ゑありて如何ゑ己れを處置すべきや、主神ゑ對して如何なる希望を惹き起すべきや、及如何ゑ、何時、万事ゑ於て先づ第一ゑ神の祝福を求むべきやを記念せられよ。

説教を構造する一例

「ハリス・ティアニン」の仁愛に就きて(モスクワ府主教フィラレトが、看護婦契約式

の前に於て述べられたる説教として、其千八百六十五年の著書第二卷に在り）

第一、吾人ハ『神言の教導に從ひ、此處に於て總て病者を看護するの契約をなしたる者の本分に關し、仁愛の教に就きて述べたるおと啻に一回のみにあらず』。

『今余ハ爾等に一の談話をなさんと思ふなり、此談話は之を想像する者の時間と勞力とを消費して想像したるものに非ず、又之が誦讀者、若くは聽聞者の時間を消費し、其想像、思想、感情を攪乱するものに非ず、乃ち老練なる智者シラフが其書中に述ぶる所の一の實話なり、曰く『智者ノ談話ヲ輕忽ニスル勿レ……老人ノ談話ヲ厭フ勿レ（全書八ノ九十一）敬虔ナル談話ハ常ニ睿智ナリ』（全書廿七ノ十一）。

第二、主の永遠の仁慈に堪ふる者とならんことと望みつゝ、舌を除くの外殆ど全身腐爛して平地に横臥せる癲病者を看護し、而して十五年

の功勞の後己自身も亦癲病者の如く死の前途久しからぬに、或試誘に遭遇せしにも拘らず、其死に至る迄之を安慰せしめたるエウローギイの物語を述ぶることなり。此現象は克肖なる大アントーニイの時より起れり。

第三、此談話より教誨となすべきことゝ左の如し。

（い）エウローギイの冒險は、古代ハリスティアニンが如何なる熱心、如何なる捨己を以て自己を仁愛の苦行の爲に犧牲に供せしやを指示す。蓋し此模範ハ己に仁慈の契約を受けたる者、及將來受けんとする者を慰籍せざるべからず、若し斯の如き人々にして眞に己を其苦行に献ずれば、則ちハリストス教の古代の功德者の途、即ち聖人の途に在る者なり。

（ろ）エウローギイの例は、又古代ハリスティアニンがハリストス教の仁愛の功勞に如何に大なる力を顯はしゝかを指示するものにして、今も猶

は斯の如くしてイエスハリストスの永福に於ける招呼を聞かんとする高尚の希望を以て功勞を立つる者を固定せざるべからず。

（は）此現象は、又或場合に於て仁愛の功德を立つる者に最も永き苦行を、不忍耐を以て失はざるが爲に、恒常忍耐の如何に必要なるかを敎ふる也。

（に）此例は人々をして重病者の狀態を見るに當て、先づ臆說、若くは心ならざる煩はしき感情、及彼等を介抱する時、自己の健康を害せらるゝを危ぶむことより癒さゞるべからざ。

第四、仁慈なる主イエスハリストスは、此國の仁慈に召されたる爾の婢等は、爾の至微なる兄弟の顏に於て爾に勤むるの善望を撰べり、願くは今彼等の受けたる功德の當初と、繼續と、完成に祝福し、彼等をして眞に己の勤務を果さしめ、以て爾の日に於て『福なる者よ來れ』てふ希望

の聲を聞くの權を彼等に得せしめんことと。

啓蒙說敎

第五十五章　啓蒙說敎の定義

啓蒙說敎とは、ハリストス敎の首要なる問題を敎科的に叙述するを云ふ。

第五十六章　說敎に啓蒙敎授の樣式を使用するを論ず

啓蒙說敎は、古代に於ては啓蒙者として或特別なる人々の階級の爲に定められたるものにして、啓蒙說敎の名あるも主として之に起因せり。現今に於ては、啓蒙敎授の樣式は恰も敎場の特有物の如く、殊に兒童敎育に用ふるに至れり。然れども人民の特別なる階級の啓蒙者は、方今己に吾人の中にあるなしと雖とも、啓蒙敎授を要する者の中には、獨り兒童のみならず、乃ち許多の成人、且つ能くハリストス正敎の性格及本原を

知らざる老人をも含有するを以て、啓蒙説教は、凡そ年の老幼を問いず分限の貴賤と論なく、人々をして普くハリストス教の眞理救道を知らしむるが爲と必須の樣式なり。

第五十七章　啓蒙説教の問題

啓蒙説教の問題となるべきものは、凡てハリストス正教の啓蒙の組織と入る所のもの、即ち信經、十誡、眞福の教、主經、教會法、及奉神禮是なり。又此と加ふべきものは、聖歴史を短簡と叙述することなり、蓋しハリストス教い歴史的の起原を有し、而して聖歴史の教とハリストス教の諸教とい相須て分離すべからざるが故なり。福アウグスティンは、其著書訓蒙と於て、以上と指示せる問題中、唯信經と於て最重要なる問題を撰ぶべく、且つ之を其一大眞理、即ち神の人類と對する愛の證據となさんが爲と解明すべき事を認めて、説教者と、聖書の最初の言より開説して、教會

現今の狀態を以て終らんことを勸告せり。斯の如く凡そ啓蒙の教い、教會史の課程中と含蓄すべきものなれども、此企圖を果さんが爲には、頗る不定として且つ困難なり。故に先づ聖歴史と畧述し、然る後其啓蒙の問題を解明するを以て至便なりとす、

第五十八章　啓蒙説教の組織法

啓蒙説教い、説教の諸の樣式を以て組織することを得れども、單と啓蒙説教と屬する樣式は、自から教場の科程の樣式として、即ちハリストス教の眞理を授くると當りて、唯或學校と於て用ふる熟語なく、及學校語の冷淡なき平易且つ順序ある叙述の樣式なり。此と依て時としてい、所謂問答體（エロテマティイチエスキイ）の法を用ふることあり。而して此方法と因て組織されたる説教は、説教者が自問自答する所の對話の体裁を有す。説教者若し克く此方法を利用することを得べ、則ち之を聖堂の講座と用ひ能ふのみならず、

一方に於ては、恰も聽衆を對話に導きて其注意を喚起し、他の一方に於ては說教組織を平易にし得る關係に於て卓越す。啓蒙說教に於ては啓蒙教授法に於けるが如く問を設くること數々にして、而して其答の小縮且つ冷淡なるべからざるは言を俟たずして明なり。

啓蒙說教の一例

至聖三者の事に就きて（序言及結句を除く）

正教會は至聖三者に關する教を如何に教ふるや。

正教會教へて曰く、吾人の主神は一なる神にして三位なりと。故に吾人は三位にして一神、一體にして位の三なる神を讃揚せん。神は一なりとは、此れ天と地と、凡そ見ゆると見へざるものを創造せる者の外他に神なきを云ふなり。嘗て主自ら人民に勸められたることあり、曰く『イズライリヤ聽ケヨ、爾ノ主神ハ一ナル主ナリ』と。然れども本性に由て一なる

神は、位に因て三あるなり。

至聖三者の位とは何々なるや。

父と子と聖神なり。吾人は父と子と聖神の名に依て、祈禱及凡ての善業を創始せざるべからず。又吾人は父と子と聖神を讃揚し、且つ感謝せざるべからず。一體にして分れざる三者なる、父と子と聖神に叩拜するは誠に當れり。天に在ては諸神も亦始なき父と子と聖神を崇めて聖々々なる哉主（サワヨフ）と謳歌し、地に於ても亦ハリストス教會は、絶えず至聖にして讃揚せらるべき父と子と聖神の三位にして一なる神の光榮を歌頌する也。

然れども此三の神聖なる位の相互の關係は如何。

一の位は他の位より異なる特別の位なり、即ち神子は永遠に神父より生れ、神聖神は永遠に神父より出づ。此等の位を混淆錯雜するは不敬虔

なり、是故ゑ正教會は斯の如き誤謬ゑ陷りて、之を矯正することを欲せざる者を嚴重ゑ議判せり、乃ち正教會は彼等を遠ざけ、且つ甚だしきゑ至ては信者の數中ゑ承認せざりき。若し今日に於ても尙ほ斯の如き誤謬を襲唱する者ある時は、均しく正義の裁判ゑ服せられ、且つ教會ゑ止まることを得ざらしむ、即ち信者と偕ゑ祈禱して、ハリストスの体血を領し、又他の諸機密を以て成聖せらるゝを得ぜ、之を約言すれば。既ゑ正教の「ハリスティアニン」ゑ數へられざる也。

神位は若し相互に分たるれば、果して均一同尊なるか、又神ゑ特有なる同一の光榮、功德、權柄及完全を有するか。

曰く、全く同尊、全く同一の光榮、功德、能力、權柄等を有す。蓋し神は其本性ゑ因て一なれば也。父と子と聖神は一性を有す、故ゑ無限の完全ゑ、均しく至聖三者の各位ゑ屬す。父と子と聖神ゑ同じく至善ゑして至聖、全能

ゑして至義、睿智ゑして全知、無限ゑして究りなき神なり。神子ゑ天より地ゑ降り、籍身して吾人の間ゑ生活せし時と雖ども、彼は父及聖神と離れざりき、且つ吾人の爲ゑ人となりしも、神たるを變へざりき。嘗て聖神は火舌の如き形を以て聖使徒ゑ降り、且つ今に至るも亦眞ゑ洗禮及其他の諸機密を信ずる者に降る時ゑ(例ひ聖神ゑ嘗て其神恩を以て吾人ゑ作動し、且つ今も作動するを接續すと雖ども)未だ曾て父及子と離れざりき、且つ今後を離れざるなり。神は分たれぜ。彼ゑ唯永遠に三位ゑ於て一なり。同一の光榮、尊貴、叩拜は神の諸位ゑ歸す。

爾は神が一體ゑして三位なるを如何なることと思惟するや、三位ゑ於ける一性、若くは本性ゑ由て一なる者に三位あるおとを如何ゑ思惟するや。斯の如き信仰の教理を知了することは能はざるゑ、啻ゑ茫弱なる吾人々類のみならぜ、神使と雖ども亦然り。此れ主の大秘密ゑして、信仰の

教は唯信仰の爲よのみ啓發せらるゝ者なり。故に吾人い須らく信仰を以て之を受けざるべからぢ。受造物が其造物者を知了そることを能はざるは何ぞ怪しむよ足らんや。吾人い自已の事、及自已の眼前よ在る事すら尚は且つ之を知り得ると甚だ易からぢ、さるを主は喜で吾人に信せしめんと欲して、此高尚なる許多のことを啓示したれば、吾人い全心全靈と尽して主よ感謝せん。吾人は若し實際よ注意して吾人の前後左右よ如何樣にして何事の生ぜるかを穿鑿せば、何處に於ても亦自から其眞理を發見せん。譬へば再び種子を與ふる所の植物は如何して種子より發生するや。活物い如何して其種類よ循ひて活物を生産するや。太陽は如何して絶えず光熱を放射しつゝ盡滅するおとなく、缺乏することなくして、常よ同一よ光り、同一よ温むるや。恐らくい一人も吾人よ向て此等の事實、及其他之よ類する無數の機密を説明する者なからん。唯之

を知了するものは、萬物を創造して之を統宰し給ふ所の神のみなり。如何なる造物か豈に此造物主のことを識了すると得んや。

「ハリマティアニン」よ、神の本性よ關する教を知了せんと試むる勿れ。固より此教は唯人々の想像せしものよあらぢ、又人意より出生したるものよも非ず、乃ち神自ら人々よ啓示せられし眞理なるを知れ。斯の如く吾人は、吾人の救者、永遠の眞理なるイエスキリストスより教へられ、斯の如く聖使徒より受け、又全地公會及教會の教師等の教授確定せしも之に外ならぢ。吾人の正公教會は亦均しく之を保守し、聖致命者等は此等の教を信ドたるが爲よ己の血を注げり。されば吾人を亦毫も疑ふことなく、全心より此教を信ド、及止を得ざる時よは此信仰の爲に致命すとも、尚此信仰を確固不拔に保守せざるべからぢ（正教宗門七ノ一第九十三問）。

至聖三者のおとよ關する神啓の教を、明瞭判然よ智識中よ保つことい

難からざる乎。

之を短簡に、神は三位一体なりてふ言を以て言ひ顯はすことを得。然らば尚一層明瞭に三位一体なる神に於ける信仰を承認せん。我は神が父と子と聖神の三位に於て一なる事、聖三者は分れも、混せざることを信じ、且つ承認す、蓋し父と子と聖神の一なる神は一性なれども、生れも出でざるの父は特別の位なり。子は父より生るゝものとして特別の位たり。

正教會に於ては、至聖三者に於けるの信仰を以て萬事を印せり、即ち正教會は父と子と聖神の名に依て、吾人に洗禮を授け、三位なる神の名に依て吾人と偕に祈禱し、各奉神禮の始と其間に於ては、一性にして分れざる三者を呼びて讃揚感謝する也。正教の「ハリスティアニン」に、教會は手指の組合、即ち十字架の像を以て、至聖三者に於ける至近の記憶を與ふ、

爾が三指を合するは、三位の神に祈禱を以て向ふの見ゆる記號をなすなり。又爾は神父に向てゝ天に在す我等の父や云々の祝文を献ト、神子に向ては主イイスハリストス神の子や我等を憐めよてふ祝文を、及神聖神に向てゝ天の王慰むる者や眞實の神云々てふ祝文を献ずるならん。爾の祈禱するは、三つの神に捧ぐるに非ず、乃ち聖三位に於て讃揚せらるべき惟一の眞神に祈禱することを覺るべし。

簡約說教

第五十九章　簡約說教の定義

聖堂說教は時として完備なる樣式に於てなし得ざるとあり、即ち說教者は事情の要求と、自己の觀察とに由て、短簡なる說教を以て限らるゝことあり。此說教は或完備なる說教を短略に簡約したるに外ならざる者にして完備なる說教樣式に對しては其略式として顯はれ、叙述上に

對して一問題を詳解せゞして唯主義のみを叙述することとなり、構造ゝ對して一説教の或部分を全く除却したる者として顯はるゝ也。

第六十章　簡約説教の種類

簡約説教は左の如く組織することを得。

(ア)完備ゝして組織正然たる演説若くは説教の構造法と同じく組織することを得。

(イ)古代ゝ於て大ゝ使用され、而して父より子ゝ、牧者より被牧者ゝ對する短翰の心髄及性質を有する書札の樣式ゝ於て組織することを得。

(ウ)特ゝ演説及説教ゝ使用せらるゝ應用の樣式ゝ於て組織することを得。

蓋し簡約説教の本質は應用たるに外ならざれゞなり。

(エ)通常の父たり、教師たる者の談話の樣式を以て、或は短き課程の樣式を以て、組織するゝことを得。

第六十一章　簡約説教を使用するを論す

簡約説教は、約ね或特別なる場合ゝ於て述べらるゝものなれども、説教者は自己の觀察ゝ由て、完備なる説教樣式ゝ換ふるゝ不完備なる樣式を以てすることを得、殊ゝ左の場合ゝ於てなし得るものとす。

(い)聖堂の講座より首要なる説教問題を叙述せる後。

(ろ)或事情ゝ因て奉神禮の長き時。

(は)説教を準備せざる時に當りて牧者に説教を要求することの預知せられざる事情ある時。

(に)概して、諸の奉神禮ゝ於て神言の説教を省くこと能はざる時是なり。

時として、斯の如き説教は、完備の説教よりも一層聽衆ゝ好結果を奏することあり、何となれゞ簡約説教は、最も記憶し易く、且つ聽衆の狀態ゝ活用し得れゞなり。故ゝ之を用ふるゝ制限を立つるが如きゝ甚だ不可

なり。

簡約説教の一例

祈禱に就きて

『義者能ク勤ムルノ求、益ヲ獲ル淺カラズ』(イヤコフ五ノ十六)

故ゝ唯義人の熱切なる祈禱は多く益を得。されども聽衆よ、吾人罪人も尚熱心なくして祈禱す。此ゝよりて吾人の祈禱は如何なるべきや。祈禱は吾人の爲ゝ益すると幾何ぞや、或は吾人は祈禱して徒ゝ時間を消費せざるか。否聽衆よ、吾人が祈禱するは空しく時間を費やそゝあらぎし て、亦吾人ゝ益あり。

吾人は祈禱ゝ熱心を有せぎと雖ども、絶えぎ祈禱する時は、自から此熱心を吾人の中に惹起すゝとを得。焰の如き熱切なる祈禱は決して偶然ゝ得らるゝ者ゝ非ぎ、又祈禱は自己の練習ならず、乃ち既ゝ祈禱ゝ居常

の練習をなしたる結果なり、報酬なり。斯の如く祈禱ゝ於ける熱心よりして吾人の靈中ゝ祈禱の烈火を燃すことを得るゝ、これ猶運動の人体ゝ温熱を生ずるが如く然り。聖マカリイ曰く、『吾人ハ抑制ヲ以テ、不忍耐ヲ以テ祈禱シツヽ、喜悅ヲ以テ平安ニ於テ祈禱スルコトニ途ヲ開クモノナリ。抑制ヲ以テ祈禱スルハ吾人ノ意思ニ在リ、而シテ平安ノ祈禱ハ恩寵ノ賜ナリ』と。故ゝ如何なる場合ゝ於ても祈禱を廢すべからず、可成的力めて祈禱せざるべからぎ。されバ鐘聲が「ハリスティアニン」を祈禱ゝ呼招する時は、縱ひ爾ゝ祈禱することを欲せざるも亦聖堂ゝ至れ、又就寢の際、或は晨起の際にゝ爾の怠惰及不注意ゝ如何ゝ爾を妨ぐるも、亦必ず自己の祈禱文を誦讀せよ。

罪は祈禱の進歩の障害となると論を俟たぎ。吾人の罪は猶浮雲の如く、神が吾人の上ゝ注射する祝福の光線を遮隔す、罪なる情慾の叫喊ゝ、猶

荒海怒濤の暴鳴の如く吾人の願望として神の聽官に達せざらしむ。然らば則ち罪人い祈禱すべからざるか。否、罪人は尙祈禱せざるべからず、祈禱却て罪人よ必要なれバなり。蓋し吾人が永久の眞理たる神よ祈禱する時い、吾人の智慧も亦眞理の光明を以て照耀せられ、吾人が無限の愛なる神よ祈禱するときは、吾人の心情も亦愛火を以て熾よせられ、吾人が至善の神よ祈禱する時は、吾人の意思も亦善事よ向けらるゝが故なり。故よ聽衆よ、或者い罪人として祈禱を始め、而して義人となりて祈禱を終り、罪惡汚穢の不潔を以て祈禱よ近づき、却て雪よりも尙白き恩寵を得て出でん。斯の如く罪人は自己の祈禱を以て、神よ赦罪を得、且つ赦罪の後は其願望をも聽容せられん。罪の雲霧は飛散し、罪なる情慾の叫喊い鎭靜し、而して神は闇澹たる暴風後の太陽の如く現はれて彼を祝福し、其祈禱は恰も乳香の馨の如く、神の爲よ喜バれん。

されば聽衆よ、祈禱に近づく時は何事を以てするも攪乱せらるゝ勿れ、祈禱よ熱心を感せざる時も亦祈り、自己よ多罪を感する時も尙禱り、唯困憊せゞして祈り禱れ、然らば爾等の祈禱は必ゞ神前よ聽容せられん

「アミン」（司祭プテヤーインの既敎）

第三分類

教會說教の精神即ち內部の性質を論ぜ

第六十二章　教會說教の內部性質の要点

教會說教の目的はハリストス教の眞理を以て聽衆を教化し、聽衆をして善良なる生活に向はしめ、並に天上の幸福に進まんと欲する熱心を起さしむるに在り、故に牧民的說教の內部の性質を成立すべき者い(第一)教化力(智慧に係る)(第二)勸化力(心意に係る)(第三)活動力(感情に係る)の三要点とす。

眞正なる牧民的說教の內部の性質たる教化力、勸化力、活動力の三者は、靈魂の諸能力に關して區別せらるゝ者なるが故に、此等の性質を實際に識別するを能はず。此れ尙實際に靈魂の諸能力を全別するを能はざるとを一般にして、苟も其一を缺く時は、他の二者も存在するをなきに至らん。人として智慧なしと假定せば之に隨伴する所の意識感情も亦共に存するをなきが如く、若し說教にして教化力なき時は、勸化力活動力も亦隨て發生するを能はざるは蓋自然の勢なり。是を以て教會說教の眞性質を顯はさんか爲に教化力てふ一語を以てするは、猶靈魂の本性を顯はすに智慧てふ定義を以て解明するが如し。然れども一問題を明瞭に理會せんには、須く種々の方法を以て之を觀察せざるべからず、因て今上に指示したる說教の屬性に就き、個々に之を論ぜん。

說教の教化力を論ぜ

第六十三章　教化力の定義

教化力とは、眞正(ハリスティアニン)の須らく有すべき概念、思想、及承服を聽衆の智慧中に生せしむる說教の力を云ふ。凡そ說教者の聽衆を教化するは、純ら聖書に示せる所のことを奉せしめ、且つ聖書の教ふるが如く信せしむる時に在り、語を換へて言はゞ、聽衆をして眞に疑ふことな

く、救贖と永生を信せしむる時よある也。

第六十四章　教化力の要件

全く教化的と以て傳道せんよい、説教者の説く所悉くハリストス教の敬虔なる精神を以て貫徹せざるべからず、即ち其説教は聖書其者の如く悉く(ア)神聖なるべく(イ)眞實なるべく(ウ)救贖的たるべきなり。

第六十五章　説教の神聖たるべきとの定義

聖書い悉く神聖なるもの也、蓋し聖書は人をして凡そ世俗的及感情的のとより離去せしめ、萬事をして天上と幸福とよ進向せしめんとすれば也。されば之を解明する説教の神聖なるべきい、素より論を俟たず、抑〻説教の神聖とい、説教者が單よ心靈上のこと、又い天上のことのみを講じて、毫も世間と通常生計の問題、及現象よ渉て述ぶべからずと云ふよあらず、如何となれば前既よ述べたるが如く、教會説教の組織中よは夥

多の眞理と諸種の問題とを存するが故也。然ども説教者は何事を述ぶるに方りても其説く所荷も肉體を樂ましめ、或は地上の事物よ思念を傾かしむるが如きことを包含すべからず、唯常よ智慧を事物の高尚なる秩序に向はしめ、思想を感情的よりして心靈的よ高め、暫時的よりして永遠的よ進ましめざるべからず、之を約言すれば、説教者は其聽衆の靈魂とハリストス教の神の觀念よ向いしむべしと云ふよ在り、されば吾人は心靈的のことを宣ぶるよ當りても心靈上のことよあらざるが如く、又神聖なることをも神聖ならざるが如く説き得ると同じく、之よ反して日常の問題を述ぶるに際しても亦、肉慾或は世俗的の精神よ由らぜ、ハリストス教の神聖なる精神よ由て述ぶることを得、此れ蓋し萬般の事物よ對する見解は、之を論ぜる人の如何と、其精神の意向如何とよ關するよ因るなり。ハリストス教の眞理を傳ふる感神の説教者が聽衆を

教誨そるや、談偶、世計上の些細なる事物ゝ涉ることあるも、之が爲ゝ聽衆の思想を神より離隔せしめ、或ゝ之を虛影の事ゝ向ゝしめざるのみならぞ、却て之ゝ因て常ゝ吾人をして神前ゝ立つが如き思ひと起さしめ、又は吾人の思念を高尙なる神の觀念ゝ留めしむ。是れ果して何に因て然るや。他なし、即ち感神の說敎者ゝ『神ニ由テ神ノ前ニ於テ』(コリンフ後書二ノ十七)語り、其導かるゝや『斯ノ世ノ靈ニアラズシテ神ノ靈ニ由リ』、且つ其口を開くや『人智敎フル所ノ言ヲ以テス、即チ靈ノ言ヲ以テスルニ非ズシテ、聖神敎フル所ノ言ヲ以テ、靈ノ情ヲ釋スルニ由ルナリ』(コリンフ前書二ノ十二、十三)斯の如く凡て神言を傳ふる說敎者も亦講座ゝ於て地上の思想勸說を述べずして、『神ニ由テ』語り、己の思考ゝ由らぞして『神ノ前ニ於テ』語るべし、蓋し吾人ゝ己が傳ふる所の主イエスハリストスを眼前ゝ見て宣敎せば、何ぞ吾人の隱れたる思念を洞視せられ、又靈魂の凡ての發動

を聞く所の全知者の前ゝ於て己の言を愧づべき理由あらんや。故に吾人は肉慾ゝ抑制せらるゝ人智の勸勉ゝ由らず、宜しく聖神の勸勉ゝ從て宣べざるべからぞ。唯此等の要件を守るゝ由てのみ其說敎ゝ神聖となり、聽衆の靈ゝ對て潔き思想と敬虔なる念慮を喚起せしむるゝとを得るなり。

第六十六章　說敎の聖非聖の外面上の徵証

說敎の聖なる外面上の徵証は、說敎中に眞理の基礎及證據の存する時、又は萬般の事物ゝ於ける觀察の標準と、主として聖書幷ゝ敎會の明哲なる敎師の書より採れる時に於て顯ゝるゝものとす。之ゝ反して說敎中ゝ人智的の傾向超過する時ゝ、其說敎は勢靈界より辭せざるを得ぞ。されども肯て說敎中ゝ智識の基礎、徵証を用ふることを排斥するに非ぞ、如何となれば、ハリストス敎ゝ常に其範圍內ゝ於ける智識の事實を排

斥したるとなく、又之を排斥せざる也。或哲學の常にハリストス教の教理と一致し、又一致するゝ世人の知れる所なり。然れども若しハリストス教を講明するゝ當りて古代教會の平易なる教を輕ト、或ゝハリストス教の聖なる證據ゝ從て其講說を確むることを愧ぢて、萬事智識ゝ基き、或ゝ總て純然たる智識的研究の狀態を附する時ゝ、其說教ゝ既ゝ神の福音ゝ非ずして世俗的智識的の性質を受けん。而して斯の如きおとゝ左の場合ゝ在るものとす。

(ア)瞑想的眞理、即ち教の定理(ドグマ)を說明するゝ當りて、若し智識上より解釋すれば、其定理ゝ既ゝ定理ゝ非ずして、平常の眞理に變易することを忘却し、竟ゝ尋常の意義を以て明瞭確實ゝ說明せんことを勉むる時ゝあり。

(イ)ハリストス教の德義法を其德義法の因て以て確定せらるゝ定理ゝ

り分離し、以て之を普通德義法の意義ゝ解明しつゝ、竟ゝ福音の德義をして自然的德義の階級ゝ下らしむる時ゝ在り。

(ウ)總て問題を叙述し、及之を說明するゝ當て、聖書又は教會の教或ゝ神父等の書ゝ由ること少なく、加ふるゝ其說教ゝ總て聖書の語氣及体裁を與ふる代りゝ、恰も故らに聖書ゝ類似する所なからしめ、力めて之を世俗の演說ゝ近からしめ、以て說教ゝ快味を與へ得るものと誤認する時、即ち之を詳言すれば、已を聽衆の眼中ゝ當代の開化と並立する學者として顯ゝさんおとを勉むる時ゝ在り。斯の如き說教ゝ、縱ひ、其中ゝ些かるハリストス教の意義ゝ反對するものなきも、其精神の向ふ所不正なり、又時としてゝ實際興味あり、或ゝ說教者ゝ開明人、若くゝ學者たるの榮譽を得せしむる事あるも、恒ゝ聽衆の心をハリストス教の神の觀念ゝ向はしむること能ゝざるなり。

第六十七章　說教の眞實たるべ事の定義

凡そ聖書は之を啓示せる神自らの眞實なるが如く眞正なるものなれば、聖書の說教も亦聖書の眞實なると均しく悉く眞實ならざるべからざるべし。故ゑ說教中に公然たる異端、僞善、詭計、欺騙等の事あるべからざるべし素より喋々するを須たざる也、何となれば凡て斯の如きおとは啻ゑ教會說教ゑ、於て之を排斥するのみならず、萬般の談話ゑ於ても亦之と排斥すべきものなれば也。而して教會說教の眞實なるべき点ゑ就きても、猶一層嚴格ゑ之を理會せざるべからず。聖使徒パウェル已の傳道の眞實なるおとを證して左の如く云へり、曰く『神ハ乃チ眞實ナリ、我濟爾ノ中ニ在テ傳フル所ノ語、今是ニシテ後非ナルニアラザルヲ證ス』と、即ち使徒の教ゑ一毫も動搖不定變易あるなく、乃ち只一の不變不易のみなりしが故ゑ、此教を以て神の義なる裁判に出づるおとを恐れざる也。尋て

聖使徒又其說教の確實なるとを證するの本原を示して左の如く言へり、曰く『我爾ノ中ニ於テ傳フル所ノ神ノ子イイススハリストス、今是ニシテ後非ナルニアラズ、イイススニ在テ惟是アルノミ、蓋シ神凡ソ許ス所ノ者ハ、イイススニ在テ是トナシ、イイススニ在テ誠トナシ、榮我儕ニ由テ神ニ歸スルヲ致ス』（コリンフ後書一ノ十八至廿）と。即ち使徒の傳道の疑ふ所なき、其傳ふる所の神の子イイススハリストスの眞實なると、神の不變なる諸約を信用せると、其イイススハリストスゑ因て成就せられたるとに由る也。ハリストス教の凡ての說教も亦斯の如くあらざるべからず、蓋し神言を傳ふる者ハ使徒の傳へたる眞理の役、及『イイススハリストスガ昨日今日及永遠ニ』傳ふる眞理の役者なれば也。

第六十八章　說教の眞實なるを證する諸点及說教の眞實なる性質に反する欠点の見ゆる徵証

前章既ニ論ヒたるが如く基督教の眞理ハ確實なるが故ニ、之を說く所の說敎も亦確實ならざるべからず、即ち其嚴格なる研究の確實不變ニして能く叙述する所の問題の性質ニ適應し、說敎中毫も聖書の神出なる眞理の精神に反對すること、及責むべきことのなからんを要す。然らざれバ其說敎ハ多少虛妄の精神を脫せざるものにして、眞正の敎化力を施すこと能ハず。而して右ニ述べたる說敎の眞實なることニ違反する欠点の見ゆる徵証ハ約ね左の如し。

(ア)明晰確然たるハリストス正敎の眞理を宣ぶるニ當て、說敎者の所說動搖して決定せざること、即ち不明是れ也。凡そ人智より出たる諸敎は、多く時日の經過すると智識の影響とニ因て變遷すれども、特り聖書ニ於ては、時日又ハ人智ニ由て毫も變遷するものニ非ず、蓋し聖書は永遠なる全智者の智慧より出たるものなれバ也。聖書ニ『主ノ道ハ世々ニ存

ス、爾曹ニ傳フル福音ハ乃チ此道ナリ』(ペートル前書一ノ二十五)と言へるハ、正に是れハリストス正敎を指したる者なり。是故に一定したる敎の箇條を正しく言ひ顯はすに當て不正確なるハ、皆福音の眞理ニ背戻せるもの也。

(イ)哲學の假定說の如く、臆說推量ニ傾向すること也。總て學術は假定、信用、暗示あらざれは立つこと能ハず、此等ハ時日の經過すると共ニ往々是となるとあり、又時としてハ非となることあり、或は此等を確乎たる眞理ニ變ずること能ハざるが爲ニ、往々日常の臆說として止まることあり。されども獨り聖書の說敎ニ至てハ、時に確實なるものとせられ、時に從て排斥せらるゝが如き臆想的のものニ非ず、蓋し聖書ハ永救の爲ニ一般ハリスティアニン)の知らざるべからざることを明瞭確實ニ敎へ、又ハ時機に會する迄、或ハ永生に至るまで人より隱蔽して聖神に悅ばるゝこと、或ハ吾人の研究だも尙及ばざること(ロマ十二ノ三)殊に聖書を說くニ方りて不變な